家庭雜誌

第四拾八號

◎民友社出版書籍目錄◎

叢書	書名	定價	郵税
◯家庭叢書第一巻	家庭の和樂	十錢	二錢
◯家庭叢書第二巻	夏の家庭	十錢	二錢
◯家庭叢書第三巻	玩具と遊戲	十錢	二錢
◯家庭叢書第四巻	家庭教育	十錢	二錢
◯家庭叢書第五巻	小兒養育	十錢	二錢
◯家庭叢書第六巻	家庭衛生	十錢	二錢
◯家庭叢書第七巻	家政整理	十錢	二錢
◯家庭叢書第八巻	簡易料理	十錢	二錢

叢書	書名	定價	郵税
◯平民叢書第一巻	十九世紀之大勢	十二錢	二錢
◯平民叢書第二巻	世界經濟上之變動	十二錢	二錢
◯平民叢書第三巻	國家と政府	十二錢	二錢
◯平民叢書第四巻	教育と遺傳	十二錢	二錢
◯平民叢書第五巻	文明之弊及其救治	十二錢	二錢

○平民叢書第六卷 現時之社會主義 定價十二錢 郵稅二錢

○平民叢書第七卷 經濟と道德 定價十二錢 郵稅二錢

○平民叢書第八卷 歷史攻究法 定價十二錢 郵稅二錢

○平民叢書第九卷 哲學變遷史 定價十二錢 郵稅二錢

○平民叢書第十卷 白哲人種之前途 定價十二錢 郵稅二錢

○平民叢書號外 銀貨之過去現在未來 定價十錢 郵稅二錢

○平民叢書號外 責任內閣 定價十錢 郵稅二錢

○十二文豪第十一卷 平田久著 カーライル 定價十八錢 郵稅四錢

○十二文豪第十二卷 竹越與三郎著 マコーレー 定價十八錢 郵稅四錢

○十二文豪第十三卷 山路彌吉著 荻生徂徠 定價十八錢 郵稅四錢

○十二文豪第十四卷 宮崎八百吉著 ヲルヅヲルス 定價十八錢 郵稅四錢

○十二文豪第十五卷 高木伊作著 ゲーテ 定價十八錢 郵稅四錢

家庭雜誌

○毎月二回十日廿五日發兌

○定價

一冊	金五錢	郵稅	金五厘
半年（十二冊）	前金五十錢	地方	金五十六錢
一年（廿四冊）	同金一圓	共	金一圓十二錢

○廣告料一行（廿四字詰一回ニ付）金八錢

○本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局

發行兼印刷人 有馬俊彥
編輯人 塚越芳太郎

發行所 東京市京橋區日吉町四番地 家庭雜誌社
（本社電話番號七十番）

明治廿八年二月廿五日發行
家庭雜誌第四拾八號

目錄



家庭雜誌第四拾八號
(明治廿八年二月廿五日發兌)

社説

交友の心得

人は友多きより力あるはなく、友少なきより貧しきはなし。家に千金の蓄あるも友なければ誰と共にか相慰まん。其心の貧しきこと宵越の錢懷に温かならぬものにも劣るべし。縱令不幸にして身窮乏の淵に沈むことありとも、友あれば艱難相拯ふべく、爲し難きことも相助けて之を成すを得べし。故に友の多少は大に其人の大小に關することとあり。

加之水の濕へるに就くが如く、火の乾けるに就くが如く、物は類を以て聚まるものなれば、友垣の間は自から相似たる所あるべく、縱令其始は互に其類を異にすることありとも、朱に交れば自から赤くなり、遂に所謂人は善惡の友に由るに至るべし。故に友の良否は亦大に其人の良否に關することあり。

去れば人は勉めて敬虔にして而も品格ある社會に成るべく多く其友を求むべきと共に、又如何に其友に交るべき乎如何に其交りを繼續すべき乎をも究め置かざるべからざるなり。

而して交友第一の秘訣は同情なり。我れ人の樂みを樂めば、人亦我が樂みを樂み、我れ人の悲みを悲めば、人亦我が悲みを悲む。

然れども中に誠實なければ、其慰藉は追從となり、扶助は虚儀となり、細々たる好語もうるさかるべく、嘻嘻たる巧笑も腹立たしかるべし。世は如何なる塲合に於ても信なくんば立たざるなり。

他の交友の秘訣は自家の本領あることとなり。交は獨り

愛に由て成立つのみのものにあらず、又敬に由て成立つものたり。凡そ人に頼母しき所あるは、其本領を保つが故にあらずや。

更に他の交友の秘訣は一種の天眞爛漫にあり。率直飾らず、氣立よくして胸中に城府を設けざるもの、人の最も就き易しとする所なり。餘りに用心深きは人に愛せらるゝ道にあらず。

去れども亦其中に自ら控へ目にずる所なくては叶はざることあり。親しきに過ぐるは却て中違ひの基なり。古人も小人の交は濃き醴の如く、君子の交は淡き水の如しと云へり。君子の交にして能く久しかるべく、愈久ふして愈厚かるべきなり。

又人に夫々の長所ありて他と相切磋し相發明するに足るは、友として相益し相匡すの本義に叶ふのみならず、亦其交誼を厚ふし且つ之を持續する所以の基ともなるべし。唯其人の過を規する如き、餘りに之れを數〻して厭はれ若くは忠告の域を過ぎて怨まるゝに至るなきを度とすべきのみ。

次には寧ろ人に求めらるゝとも、人に求むること勿れ、親愛を人に責むること多ければ失望することあり。恩を施して報を望まざれば、何人か之れに友たらざらんや。

次は則ち人を知るの明あるべきこと是れなり。人を知て各其長ずる所に於て交はるべし。天下恩に感ぜざるの人あるも、知己に感ぜざるの人なし。

要するに交友の道は多端にして、固より此等數事に止まらず。然れども心徇に之を求めば何ぞ其道なきを憂へんや。吾人は唯人の之を求めざるを憂ふるのみ。嘗て聞く、大隈伯の少壯にして國事に奔走する、伯の北堂客を好んで其家遂に同志の倶樂部となり、伯は之が倶樂部長たる故を以て伯の伯たる所以を成就せしこと最も多しと。是れ獨り大隈伯に於て之を見るのみなら

ず、古來交友の助けにて其人物を成就したるもの一二にして足らざるべし。世の爲すあらんと欲するものは、男子にまれ婦人にまれ、大に意を致す所なくして可ならんや。

科學

天地間の一怪事（其二）

竹越竹代

（四）勢力は靜止せる物躰の中にもあり

事少しく錯雜すれども、勢力の保存を説明するに先だちて、今一つのことを説かざるべからず。即ち位地の勢力と云ふことなり。

早や合點の人あらば、先きの紙上に鐵砲王に付きて説明したる、勢力の話しを聞きて、もはや勢力と云ふものとは、全き知己になりし積りのものもあらん。されど若し此の同じ勢力が、靜止せる物躰にもありと云ふ時は、など頭を傾むけざるを得べき。勢力は實に屋根の上に止まりたる瓦の中にもあるなり。そは風吹き荒れて、屋上の瓦を吹き飛ばすときに、不幸にもその下を通行する人ありとせよ。小さき瓦の一片も、屈强なる丈夫の頭を傷つけて、血を流すにあらずや。されば勢力は、靜かなる瓦の中にもあれども、唯だ其の靜かなる性質にあると、運動の中にあるとの差によりて、異なる樣を顯わすのみ。

これによりて、一とつの心付きしことあり。彼の二樣の勢力の、互がひに異なるごとく、低き所にある物躰と、高き所にある物躰も、其勢力に於て亦た相異なること是也。近かくは日本海軍が軍艦より、陸上の砲臺にある支那兵を攻してとを想像せよ。何れが地位の最も益なりしものぞ。必ず知らん上より打ちおろす銃丸は、下より打ち上ぐる砲丸よりも、敵を殺すに利益あ

ることを。倘ほ手近かく試驗せんと思ふ人は、屋根に上りて、下なる人と石のなげ合を爲しても知るべし。下なる人は利少なふして、上なるものゝ利あるに如かざることを。この上なる者の利多きは其位地の高きよりして其擲つ石の勢力多きによるが故に之を指して、位地の勢力とは云ふなり。

（五）位地の勢力と水車

太郎と次郎と云へる二人の兄弟ありて、各々その父より水車一臺づゝを貰ひ受けて、その營業となせり。幸ひにその邊に二たつの同じ位なる池水ありて、水車を造るには、屈竟なりければ、兄も弟も同じ業を始じめける。然るに不思議なることにぞありけり。そは兄なる太郎は、毎月その水車にて數百名の米を搗き得て、利益も亦たそれに伴なへるに、弟は僅かにその十分の一をも搗き得ざるが故に、一家の收入も不足勝ちなり。このこと父の耳に達しければ、父は不思議に思ひ、先づ次郎が水車に行きて、その仕掛けを見しに、池水はとよ〳〵と流れて小川をなし、その小川の口に水車を掛けたるが、水車はゆる〳〵と廻りたり。去りて太郎の水車場に至たり見るに、茲こは涯の根元なりしが、太郎は其の池を涯の端にて切り落し、池水は人工の瀧を爲したるが、水聲どう〳〵と當りに響ける。その瀧の下に、水車を置きて、車はせわしく廻轉せるを見き。不思議に思ひたる父が胸は、これにて晴れたり。誰れもその利益の差あるの原因は、明かに高所の水と、低所の水とによれることを知るべし。これ矢張位地の勢力の多少を示すに、最も好き適例なり。

（六）曲りたる弓と位地の勢力

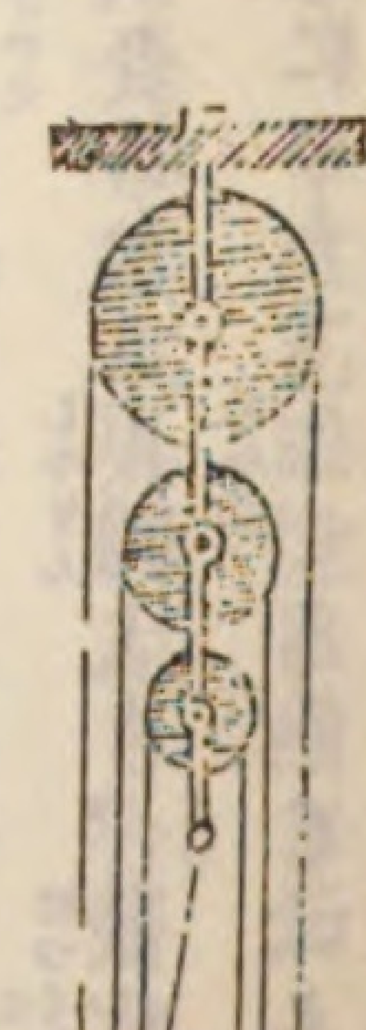
こゝにまた變りたる考へは起これり。引き張りたる弓に矢をつがひて、へうと放つその矢先きは、銃丸と同じく人をも殺し、木をも貫けども、鐵砲は火藥のために進すみ、此れは彈力のために發進して、其性質相異

なれるとなり。これは容易に解釋し得らるべし。弓の引き張りたるときは、元に復らんとする位地の勢力が、中に含れたるを、矢を銜ひて之を放つときは、もはや運動の勢力と變化して銃丸と同じ性質となれるなり。時計が時をたがへず迴轉するも、全く位地の勢力が『ぜんまい』の上に働けるが故へなり。又た之れと反對にして、運動の勢力が、位地の勢力と變ずることもあり。これは石を空中に擲げ上ぐるによりて見るを得べし。石を手より離れしむる時は、運動の勢力によりて上に進めども、上りて頂上に達せし時は、位地の勢力と變じ、屋上の瓦と同なじ性質とはなるなり。

（七）器械の働

さて又た茲に知るを要する今ま一の事あり。即ち勢力は、自然がその庫の鍵をにぎりて、一分時も放さゞるが故へに、人類が如何に骨を折ると雖も、その一部分をも製造し得べからざることなり。これは機械によりて容易に說明し得べし。

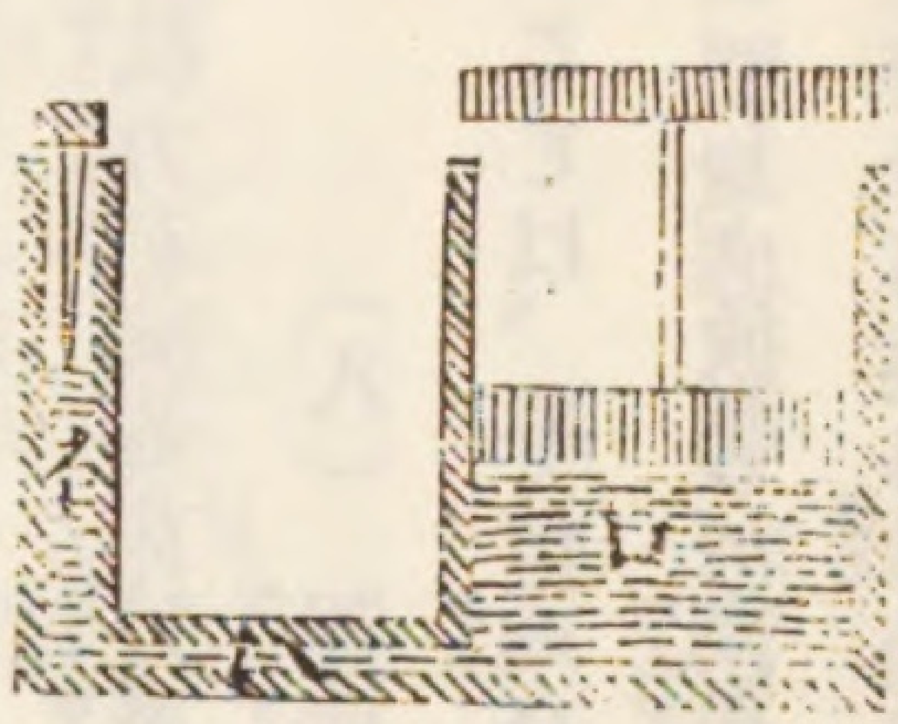
試みに圖の如き六個の車輪ある滑車を造るとせよ、



第一圖

若し車の間に少しの摩擦のなきときは、（イ）なる重みは其六倍の重みある（ロ）を上ぐるを得べし。たやすく言ひ換ゆれば、（イ）が一貫目の重もさあるときは、（ロ）の六貫目の重みあるものを引ぎ上ぐるを得べし。

又た今一つの器械を以て說明せんに、第二圖は水壓器なり。仕掛けは圖に見ゆる如く、（イ）と（ロ）との大小二箇の管を備へ、互がひにその下部は（ハ）の管によりて連ら


第二圖

なりたりとせよ。而して小さき管は、その口一分あり、大なる管は一尺ありとせよ。之れに水を入れて、各々その管には堅き口を施こす時は、一方を壓すれば一方上り、一方下がれば一方高まる樣になるべし。かくて小さき管の口を壓して、一尺下だりたるとき、大なる管は僅かにその百分一、即ち一分の上に上り、小さき管の口一丈下だるも、大なる管の口は僅かに一寸上るに過ぎざるべし。これその中の水の量に隨がひて、その上下の度を異にするものなるは、何人も能く知り得る所なるべし。

此の器械によりて、我等は何を知り得べきやと云ふに。他ならず、小さき管口を一尺壓するには、一尺丈けの勢力を用ちひざるべからず。一尺の勢力に對する報酬は、矢張大なる管口にそれ丈けの上りを見るの外、餘分なる結果を顯わさゞること、滑車に於けるも亦た同じ。これによりても知らるゝは、我等は決して勢力の一部分をも造ることを得ず。只だ器械を以てその勢力の抵抗力を成る丈け減ずるを得るのみ。

(八)　運動の止まるとき熱顯わる

このことは、學校通ひの懶惰諸生に問けば、最も能く答ふべし。彼等が漢學のねむたき講義を聞きつゝ、腕のボタンを机の端にすり付けし後にて、ボタンと机に熱の出づることは、毎々經驗せるところなるべし。父の遊獵の彈丸を取り出だして、石の上に上せ、鐵槌にてこん／＼と打ち延せるいたづら息子は、鉛に熱の發することを知れるなるべし。毎夜神燈を點ずる老母は、燧石より火の發するを答へ、鐵道局のボーイは、暗夜油のきれたる車輪より、發火するを知れり。さてこの磨擦によりて生ぜる熱と云ふものは、元來如何なるものぞと云ふことは、久しく學者を惑わして、遂にはその本性は、とても研究し得べきものにあらずと迄云はれたり。少しく學術の進歩して後も、熱は一種の物質

なりとの說、盛んに行こなはれけるが、今日は遂に熱の本性を見破りて、こは分子間の運動に外かならざることを發見したり。即ち語を變て云へば、物躰と物躰とが、人の目に見ゆべき運動の止まりし後は、其物躰を組織する分子と分子との目に見へぬ運動と變じたるものこそ即ち熱也。目にも見へざる分子のことを、能くもかく斷定せらるゝよと笑ふ人あらば、その推理の道順を示して、之れが無理ならざるを說明せん。今鐵の一片を取りて、酸素瓦斯の中にて燃すに、鐵は初めの重みより、遙るかに重もくなるを見る。これ鐵を組織する分子の間に酸素の加わりし證なるを知るべし。然るに、同じ鐵片を磨擦して、熱の生ぜし時に、重みを計りて見よ、同じく熱は熱なれども、酸素の中に燃したるが如くに、鐵より外かの重みとては更に感ぜず。これ磨擦熱が、酸素の如く一種の他の物質にあらざるの證として見るべき結果なり。次ぎに如何なれば、これを分子間の運動と云ふやと云ふに、こは見易すき道理なり。今滊車に人を積て、迅速に走る途中、俄然車輪の止まると假定せよ。中なる人は如何になるべき、甲は乙の上につきかゝり、乙は丙をおし、丙は又た先きなる人にぶち合て、幸に死を免るゝも、大なる負傷は免かれざるべし。物躰の磨擦は則ち物躰間の分子に之と同じき激動の現象を生ずるものなるは、見ずしても知るを得べき道理にあらずや。よし熱が、分子の運動より成り立てるか、或は分子の運動によりて、一種の熱なる別物を作くれるか、そは問題の外にして、未だ研究は遂けられざれども、とも角も熱が分子の運動の間に起こることは、消すべからざる事實なるが如し。



文藝

村の教師

殘月樓主人

其三

利と名とはいかばかり　人の精神を腐たすらむ
孔雀の羽をいたゞきて　くらきまなこを驚かし
法律てふ橋にわれ立て　人をば淵にしづむなる
都會の人のゆめにだに　知らぬ境ひは田舍なり
都のちまたを去れる事　さのみ遠きにあらぬ共
かた山ざとに住む民は　今も神代の手ぶりあり
文明といふ光りはも　富てふものを照すらむ。
電燈といふ名をきゝて　首かたぶくる民もあり
文明といふ道路はしも　富てふ者のみ行く道か
滊車のはしれる音聞て　世をば過せる民もあり

かく質樸なる山ざとの　ひとの心をゆくりなく
狂んはかり刺撃つるは　くらき國原てらさむと
天つ光りのさしいでし　わが征清の義戰なり
賤も樵夫もあさまだき　あふ人ごとに何ごとも
まづ打おきて語らふは　この御軍のうわさなり
神の御代より動きなき　神の御國にあだなすは
憎きえびすと取る鍬を　畑になげうつ民もあり
神の御代より傳はれる　日本魂しらせんと
手にもつ斧をふり上て　夕食忘るゝしづもあり
日々の新聞をよむ人の　家に行つゝたゞかひの
今日はいかにと問毎に　とはるゝ人も自からの
よみし所をいくたびも　くり返しつゝ語るなり
ひるの休みにけぶり草　吹まもおしと語りあひ
すびつのもとの夜話も　皆たゞかひの外ならず」
この山ざとに時ならぬ　波の如くにさわぎてし
ひとの心をしづめしは　村の教師のちからなり

佐久良義雄と呼れたる　村の教師は宣戰の
詔勅讀たる夜半なりき　村人たちをあつめつゝ
此たゝかひの故よしを　いとわき易く語らひき
おのが利益を計りつゝ　國てふ事はおもはざる
地方にて名ある大地主　都會に名ある富人の
いくさのしろの公債を　せんかたなげに贖ひて
巨多のこがね出しつと　誇りをるとは殊なりて
かた山ざとにすむ民の　心はいとも眞實なりや
村の教師のことのはに　村人たちはふるひたち
はやりながらも常の如　おのが務をいそしみて
家にあまりのある民は　をさめし金を献り
家にのこりのなき民は　草鞋つくりて献まつる
村のうなゐは栗ひろひ　村の少女ははたおりて
えたる金をおのがじゝ　取集めつゝさゝぐなり」
人のふむべき道をしも　いと懇切にさとしつゝ
學びの業をたゆみなく　をしふる教師の勳功に

このひとむらの若者は　あしき遊びの聲もなく
親の言葉はきゝいれず　わがまゝなりし幼子も
教師の教へは温順しく　言れしまゝに守りつゝ
村のうなゐが親のごと　慕ふ教師はかねてより
豫備の務のある身とて　この御軍に召されたり」
あるは林をへだてつゝ　あるは田畑を中にして
のきをならぶる隣なく　家居は遠くはなるれど
まじわりあつき一村は　一つの家にことならず
吉きに凶きにきく時は　とひも訪れも往かひて
我上のごとつとめつゝ　我家のごとさわぐなり」
教師の噂さは時のまに　狹き村にぞひろまれる
ひろまるやがて一村の　騒ぎとことそは成にけれ
など行ますと子らは泣　をしき人をと親はいふ
夕べにきゝて明日は早　出たちますとこの朝け
村人みなはつどひけり　かた山かげの此やどに

其　四

幼なき子らを敎ふるは　たやすき業と誰かいふ
清きこゝろの糸すぢは　いかなる色にも染る也
枝やはらかに若き木は　いかなる樣にも育つ也
世をばうごかす英雄も　くにをすゝむる賢人も
いへを修さむる良妻も　敎へのにはのこ松なり
國のもとゐを固むなる　敎師の務はおもけれど
花のみめづる世の人は　つゆの恵はよそにして
其身をかざる名譽なく　得べき報酬はいと薄し
かた山里にすまひして　身を敎育のいけにへに
さゝげし義雄は國の爲　病たる母をのこしおき
なれし生徒を跡にして　いてたゝむとす此朝け」
心をゝしきたらちねの　泣ぬは泣くにいや益て
さらばといふも口籠つ　立うき袖をわかちつゝ
村をさはじめむら人に　打おくられて門をいづ
にはにそびゆる老杉も　かどを流るゝさゝ川も
此いさましき出たちを　送るに似たり聲たてゝ

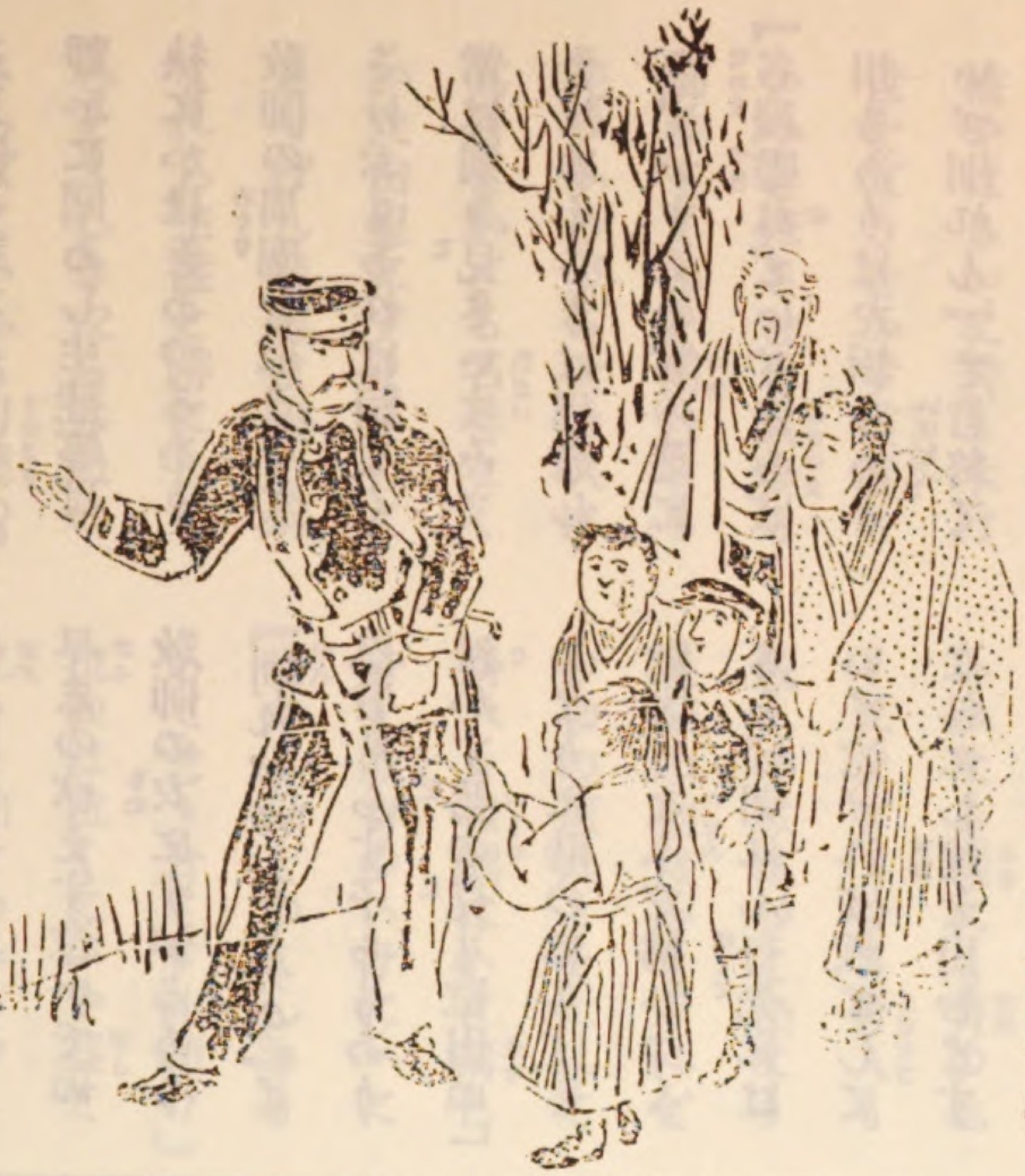
其五

かよひ馴れたる學校に　敎師はまづぞ到りける
そのまなび屋の廣庭に　生徒はなべて集まれり
敎師は室のうちに入り　天皇陛下の御肖像を
かゝげし前に拜がみて　わが敎場に入りたちぬ
ふりにし机五六十　たてたる塗板色志ろく
いとところなき敎場も　朝夕なれしかたなれば
つくゑに椅子に塗板に　無言の別れ告げにけり
また廣庭にたちいでゝ　並べる生徒に向ひけり
敎師の眼はうるほひぬ　やさしき顔は曇りたり
『さらばよ諸君われは今　遠き旅路にゆかむとす
諸君をおきてゆく事は　心ぐるしとおもへども
御國の爲にいでたつは　御國の民のほまれなり
諸君も第二の兵士ぞ　日本のくにの國たみは
國と君との御ためには　命をすてゝすゝむなり
此の言の葉はいつでも　諸君の胸に志るされよ

次の教師のきたりなば　共ことばをばよく守り
わが教へつる時のごと　學びの道をつとめてよ
猶告げたしと思ふこと　數多あれども……
さらばよ諸君さらばよ』と　いふ聲いたく震へたり
靜かに聞ゐし生徒等は　早志のびえず泣いでぬ
袂にかほをあつるあり　教師の衣にすがるあり
教師の周圍を取まきて　『別れがつらし先生』と
さけぶもあれは詞なく　忍音もらす子らもあり
常は弱き兒さいなみて　泣かす男の兒も泣出ぬ」
まだゆくさきは程遠し　あまりに時の移らばと
うずがす人の言の葉に　教師はなみだ拂ひつゝ
『名殘盡ねどいざさらば　さらば別れん行先には
川もありはた坂もあり　いと遠ければ玆にして
いざ別れん』と言終て　なれにし庭を出むとす
遠きをいかで厭ふべき　滊車に乘ります處まで
共にゆかんを許して』と　聲をそろへて已がじゝ

ま心こめしことの葉に　さらば共にと立いでぬ」
いつの程にか造りけむ　いと大きなる天つ日の
御旗をさきに進めつゝ　『進めやうてや』と此日頃
習ひし軍歌うたひつれ　稚なき子をおふもあり
幼きが手を引くもあり　生徒は教師を中にして
まへにうしろに村人は　打したがひて進みゆく」
木葉いろづく秋の日に　生徒とともに茸とりし
山も背面に見なしつゝ　雲雀うたへる春の日に
ともに蕨をあさりつる　鎮守の森をあとにして
岩ねこゞしき坂を越え　流れするどき川をすぎ
二里に餘れるとほ道を　いつしかつきぬ停車場」
無情の時はとく去りて　滊車は今こそ着にけれ
をしむ思につゝまれて　教師は車に打ちのりぬ
たちならびたる村人と　生徒は聲をあはせつゝ
日本帝國萬々歲　帝國陸軍萬々歲
佐久良先生萬歲と　繰返しつゝとなふなり

而わを窓より出しつゝ　教師は帽をうちふれり
笛のね胸をひゞかせて　車は程なくはせいでぬ



家に殘れるたらちねと　おくれる生徒村びとの
いくその思のせたりし　車はとほく馳せ去りて
み送る空にはるぐ＼と　煙り一すぢたなびけり

其　六

いとねもごろに導まし　村の教師は軍隊の
規律をかたく守りつゝ　勝れし兵士と呼れたり
かの平壤の激戰に　日本男子の名に耻ぢず
武士の子の名にはぢぬ　功を彼れはたてにけり
海を渡りて行きつるは　野山の草木うちしをれ
こずゑの蟬の聲かれて　暑さはげしき頃なりき
今は雪ふるもろこしの　すさぶ北風身をきりて
銃取る手ぶさ氷るてふ　さむき境にたゞかへり
明日の軍をおもひつゝ　眠るとすれど眠られぬ
氷りの床のうたゝねの　夢はいづこに通ふらむ

（完）

家郷への書信

湖處子

博多を午前九時四十何分の滊車にて出立、午後二時過

門司に着し、古賀文司店へ案内せられ候。宇品通の滊船は毎日午後三時の開帆と申し、今日出發するは龍田川丸とか申し、大坂商船會社の持船の中にては船躰速力、共に屈指の逸物に御坐候。併し僅かに半時間の猶豫しかなければ、心を許す間もなかりしことに御坐候。

舟にては例に仍つてサアドクラッスを取る積りにて候處、同室に落ち合せたる肥後ナマリの町人的紳士三名、同書生一名、孰れとも中等の艙こみにて、番頭先生生憎同郷のものに候て、「宮崎さん下等で宜しいのですか、エ、下等で」と云ふ樣な事を、何度も繰り返され、當人はヒーヾ的趣味を以て申すものに有之べけれど、大に有難迷惑を感じ、相知らぬ同席の人々へは差構はねど、番頭先生に對して氣の毒に相成、兎に角下等切手に濟して、悪くば舟にて切り代ゆべしと、申したれど、イッソ中等になされては如何と強請せられ、遂に平民室を取る事を、耻づべき事の樣に思ふ樣なる考へを惹起され、遂に中等に切り代へ番頭先生の滿足を買ひ候、我みづから我が痴騃には呆れられ候。

身の高く、顔の大きく、鼻の巨き、ワン〳〵（化物の方語）の樣な下女、午飯の膳を運び來り、僅かに一腕を盡し候處、下から○○どん御客樣を艀が呼ますと、呼はり候故、誰も彼も二腕目を唯一口にカキこみ、白銀投げ出して勘定濟し、直樣波止場に駈け下り候處、沖なる滊船四五隻もあるが中に、出船と思はるゝか烟吹き居る、艀の中は半足を容るゝ餘地なき迄にこみあひ、沈みはせぬか、大丈夫だスと、船頭のサヽヤクも、氣味の悪しき程にて候ひき。本船に移り、中等室に下り候處、七八疊ばかりの室内、艀同樣にこみあひ室の一方に碁盤を圍みたる一群の學生の、悠々然として地歩を占領したるが外は、縁もゆかりもなき若き男女の互ひに枕をならべ、背を合せて、中に戸一枚も立

てざる劒呑さ、奥の方にと進み候へば、ぼんやりと闇き中に、四五の婦人即功紙うつたる、頭ならべたるを見、端なく歸省の際御身が船醉し玉ひし光景を思ひ浮べ候碌々身を置く處も候はねば、餘儀なく眞中の冷たき鐵柱を懷いて坐り、候ひしが二人旅の時と思ひ比べて我ながら憐れに感じ申候。

是を糸口として、限りなき感想は、連鎖的に方寸の中に回轉しつゝ初まり、一寸も先へゆく心地は致さず、心は過ぎ來し路を溯り、立ち出でたる、戸口に立ち返り候、されど目に見ゆるものに候はねは、御身はかくとも知り玉はず、偏へに我が浮かれゆくとのみ思ひ玉ふらんなど、思ひつゞけて、知らず〳〵涙のこぼるゝに到り候。

甲板は舟の中の天國に御坐候、追々甲板に上るものも之ありき乘合客は皆朋友にして、人は互に語りあひ申居候。されど自分而已は、甲板も厭なり、話も厭なり、頭を鐵柱に倚せて空しく煢獨を守り候ひき。

船宇品に着き候は、翌廿五日の午前三時の頃にて、回漕店に夜の明くるを待ち、夜明けて濶く朗かなる海上の曙を二階より見下し、巷に出でゝ〇〇（鄉里の大工）等が建てたりと云ふ幾棟の糧食小屋が、海に向ひて片側町を成せるを見候。

夫より車を駈つて、廣島に向ひ候、宇品廣島間は近一里にして車賃は十錢と申し候、東京に比すれば廉にて候。

此日廣島にて旅順陷落の電報に接し、自分の如き懦夫も拳を振つて起つの慨を生じ候。

廣島の細見はくだ〳〵しければ後に讓り申すべく、唯城北二葉山より見下したる大躰觀を申せば、

　　朝日かげ流石にひろき廣嶋も
　　二葉山より一目なりけり

是にて御察し下さるべく候、併し宮地岳より平松を見

下すよりも餘程大げさなものに候。
當地にて蘇峰先生に御目にかゝる都合に候ひし處、先生は既に歸京されし後にて候ひしかば、直ちに其跡を追ふこと相成、廣島には一夜寐て、翌朝宇品に返り、舟にて神戸に向ひ候。
宇品神戸間は、願の如く平民室に安堵し候處、何處の棚も朝鮮よりの歸來兵に占領せられ、中央の上り口の一角に、黒子ばかりの地を得て、尻から先にモグリこみ候。
乘客皆兵士を擁して、戰爭譚を聽き居り、兵士は皆口を動かし、手を動かし、身躰を動かして手柄を語り、人を驚かすの意氣虹の如く威張つたるものに候。兩三年間は驕る兵士を見るべきことと存候。
神戸と申せば、田舎漢をして蛇蝎の如く恐れ且つ、憎ましむる滊船宿を廓想し候處、大坂商船會社は、嚮に乘客の爲に辨當料、布團料の外は茶代も煙草の火の代も取らずと云ふ、非常に便利なる待合所を設け居候由、小生も其待合所に就き、實驗致し候處、荷物も棧橋の外より車にて運び呉れ、見苦しからぬ坐敷もあり、坐布團もあり、火鉢もあり、釜もあり然して拂と云へば唯辨當代と布團代に止まると、即ち聞く所に異ならず候。固より可なりの建物を使用し、幾多の男女を使ひ候へば、此位の收入にてはトテも支ふべくもなく、いづれ我々が拂ふ所の船賃の幾分かが、形を變へて、此待合所となりし事とは察せられ候へども、旅にて掠略さるゝに慣れたる身に、斯かる穿鑿立をする遑なく、之に就く事歸るが如く、便利と云ふ念はさて置き、感謝の念先だち候。
乘客の凡ては殆ど此待合所に就き候、人情に亡び、人情に從ふものは榮ゆ、待合所出來て、さしも久しく人情の賊として凡夫盛を極め居りし滊船宿は、忽ち復讐せられ候。

旅順の捷報に亞で、最も愉快を感じたるは、是の復讐の一事にて候ひき。

廿七日、神戸市は祝勝軍旗の中に看出され候。其日正午、東海道滊車に投じ候、宛も第四師團召集令を發し、室中往々應募兵の乘り居るを認め候、到る處の停車場、其他の辻々には、所在の村民、兵士の名を記したる旗推し立てゝ密集し、滊車の過ぐる毎に、其名を歡呼し、萬歳を唱へ候。我が征西軍は第一着に此處に於て勝てるものに御坐候。

大坂より上京するものとて、品位ある一婦人、上り口に乘りてありしが、岐阜の停車場にて、客の上下する咄嗟の際、手鞄をすられ候、貨幣は澤山入つて居ざれど、重要の書き物は皆其中にありしとて、ベッソ面を作り、泣く樣に拜む樣に車掌に依賴致候。如何にも氣の毒に堪えぬ次第なりき。滊車旅行、殊に乘客出入の際は注意すべき事に御坐候。

廿八日の朝東京に着き候國を出で丶丁度一週間目に御坐候。

父、母の惠　下

藤島雪子

志をれはてたる菫の花束は、富山なる花賣娘のおくりものなり。富山に移り住みて、學校に通ひし頃、かしこにては貧しき家の子のみを集めて敎ふる學校、殊更に設けられてありき。そこに通ふ子のうちに、朝とく學校に行く前に、花めせ花めせと、ちまたを賣りありく幼なきをみな子あり。年は十三四なりしならむ。日々同じ頃同じ道にて逢ひしかば、いづこの子とは知らねど、風ふく日も雨ふる日も、小さき籠を肩にして行く彼を見るごとに、いたくいとほしと思ひゐたり。名にしおふみこし路の北風身を切るごとく吹すさび、雪

いと高く降つめるあした、かれに出あひしに、あゝけさは少しも賣れぬ事よと、悲しげに獨ぢ行くが、あまりのいとほしさに、かれを呼とめて、けふ夕つ方に我家にこよ、母君にこひてあがなひてむ、必らず來よといひて別れき。學校はてゝ家に歸り、此由母君に告げまつりしに、そはあはれなる子よとのたまひぬ。いかにしけむと待ゐたる程、茶の花仙水などをたづさへて、いと恥しげに、くりやの方に入り來りぬ。そを皆もとめて父はありや、母はと問ふに、家には年たけたる父一人あり。老の病に打臥しをれば、薄き煙のしろにもと常に花をうりありき、暑き比は氷を賣りてなど語る、母君も聞まして、いたくあはれがりたまひ、それよりは日ごとに何くれの花を、いさゝかよき價もてあがなひやりぬ。又學の道に志ぶかきをあはれびて、わが使ひたる教科書、草子、筆墨鉛筆など與ふるに、いたく喜ぶを見て、我も嬉しかりき。父君、千葉に轉任し給ひしかば、家をあげて東京に歸らんとしける前の夜、かの女は問ひ來て、溢るゝ泪を袖におさへつゝ、別を惜みたりき。其折に、この花束は、わが心をこめ侍りて、色よき花のかぎりをあつめしなればとて、おこせしなり。それより後、年の始めには必ずふみをおこせぬ。年ごとに筆の跡もうつくしうなりまされり。あはれ、過さりし時の事は、忘れはつる人少なからぬに、はつかばかりの情けを忘れぬ心のいとほしやと、母君もをり〳〵のたまひいづ。今はいかにして暮してあらむ。われは心まめにすなほなりしかのをみな子の、さきはひあらむ事をはるかに祈るなり。

いさゝか色さめたる寫眞は、學校にゐし頃、殊に親しくせし友どちを寫せしになん有ける。此頃は同じ學の窓のもとに机をならべ、うらなく語らひゐしを、今は一人は信州に、一人は佐賀に、一人は東京に、一人はなき人の數に入りぬ。そは前橋の人なりき。いにし廿

四年の夏、父母君と伊香保のいで湯に物しける時、父君におほやけの事しげくて、とく歸りまし母君とわれはしばしおくれて歸るさ、前橋にいたりて、母君は、伊香保にて逢ひたりし知事の君の夫人のもとを音づれ給ひ、われはかの友の家にいたれりき。いたく喜びて、こよひ一夜はと止めしかど、母君の急ぎ給ひしかば、停車場までおくり來て別れたりき。されど其折には、又こそといひ契りて、唯かりそめの別と思ひしを、其年の秋わびしき憂世の風にさそはれて、あへなくなりぬとの知らせ來りつ。あはれ刀根川の水は、日毎によどみなく流れゆけど、かの友のおもわはふたゝび見ん事かたし。いとも悲しきかな。

いとうるはしき扇は、千葉にありし時、客人の君の給ひしなり。さきをとゝしの十二月、學校の冬の休みに、千葉にかへりゐつる頃、東京より客人の君のとひきましぬ。はじめて來ましつるなれば、こゝかしこを見せまつらむと、伯父君とわれと家人と四人、車にて寒川なる官舍をいでゝ、まづ大嚴寺におもぶく。父君の愛したまふ獵犬の、此日比わが朝毎に肉を與ふるにや馴れけむ、追へど去らで、我車の跡を慕ひきぬ。道のほど此わたりの名物なる芋より作れる葛を晒し、又大根あまたかけつらねたる賤が垣ね、幼子はあさりなどむきゐて軒には網ほしたる海士が家の景色もあはれなり町をはなれて田畑の中道を行くに、おき渡したる霜、朝日にとけていたくぬかりたり。鵜といふ鳥の海より飛び來れば、高き常盤木の上つ方は、黒くかれはてたるやうなる木立の陰を過て、坂道をおりのぼりしつゝ、志しつる方に着ぬ。境内いと廣くて、櫻のよみ花の三つ四つみゆるもめづらし。案内こひて本堂に入り、本尊を拜み奉る。古き錦のとばりの奥に、慈悲のおもわを示し給ふもかしこしや、さて寺僧の住む方に請ぜられて、古代の佛畫數幅を見る。こはこの寺の寶物

にて、容易く人にみせぬなるを、殊更に寳庫よりいだしつるよしにて、あつき志いと嬉しと、客人の君も喜びましぬ。大なる寺の常とて、居間のいと廣きに、火をけの火の灰がちになれるを見つゝ、夏ならましかばと家人のさゝやかにつぶやくもをかし。こゝを出で、又小松生たる山道をのぼる。犬は尾打ふりて、我跡にしたがへり。此わたり茸の生る所とて、秋の末つ方は、千葉の人の、老たるも若きも來つどひつゝ、いとにぎはしとぞ。今は小松まじりに袖やれたる尾花の、人めづらしげに招くもあはれなり。道の惡しきに、大方は車より下りて語らひつゝゆく。野菊撫子などの咲のこりたる小川のきしに、小魚すくふうなる、烏うり生かゝれる杉垣のもとに、子をおへる賤の女。しとゞの二聲三聲冬のあはれを告る水車場の小屋のまへに、まり歌うたへる童女など、皆われらを見おくり、伴へる犬をむくつけゞに見るもをかし、千葉寺にいたるに寺の前なる老木の銀杏樹の染め盡したる、もみぢは紅にのみ限らざりけりとおぼゆ。いとよく色づきたる事よとみあぐる袖に、はら〳〵とちり來るも、心ありてにやとをかし。堂にのぼるに、千葉に古きゆかりある寺とて、年へたる額繪馬などとり〴〵に見捨かたきが多かり。そこより畑道を、左にめぐり右にをれて、猪鼻台に至る、こゝは高等中學校病院などのある所にて千葉寒川の町々を、なべて一目に見おろし、遙なる海も目の前に、安房上總の山など繪にかきたらむが如く、海士の小舟の數しれず浮べるもおもしろく、はせゆく汽船の煙もいひしらず。われらもさながら畫中の人となりたる心地すと、伯父君のたまふ。こゝより車をかへし、千葉神社に詣うで、公園に至りて羽衣の松を見、師範學校の前わたりして、家に歸りしは三時過る比なりき。夕つ方、父君縣廳より歸り來まして、客人の君と、何くれと物がたりゐたまへり。折しも古き暦の十

一月十五日の夜とて、隈なき月は庭の池水にうかび、籬のもとに咲き殘れる菊をてらすもえならずをかし。あまりに月の清ければ、客人の君と稻毛にものせむ、いましも來よと父君のゝたまふまに〳〵、又車にてゆく。千葉の町をはなれ、登戸を過て袖の浦の渚に出ぬ。こゝのあたりは遠あさなれば、波あらくはあらず。風は少し身にしみておぼゆれど、すみ渡れる月の光、すさまじといひくだすべくもあらず。こがねの波の上に、しろがねの鏡のやうなる影の浮べるさま、たとへん方なし。海のほとりを二十丁あまりゆきて、海氣館にいたりぬ。夏の比は、海水浴にものする人の來つどひ、秋も冬もをかしき景色をめづとて、來る人たえぬ家なり。須磨舞子は行みし事なけれど、かしこの濱べは、松みどりにいさご白しと聞しを、こゝも又年ふりたる磯馴松、こゝにかしこに立ならびて、いさごの上には草一もともあらず、さながら玉を敷きたらむやうなるに、松の絶間〳〵より海みえて、さやけき月の照渡れる樣、すぐれし歌人、秀でたる畫たくみの筆を得ましかばとおぼゆ。家あるじ立出て、老木の松かげにたてたる離れ屋にしるべす。屋の樣田舍だちたるはあるじの心しらひにて、室内のしつらひはた心にくし。松蔭をそゞろありきして、此海の景色を殘して立さらむが、あかず口をしけれど、時うつりなば母君の待ちまさむと、空高くのぼれる月に送られて、九時半頃家にかへりぬ。又のあした風いと寒かりけれど、客人の君は、東京になすべき事多かる身なればとて、歸りまさむとす。來たまふ時は車なりしかば、歸さは舟よからむと、母君のたまふ。父君も、さは今日は日曜にて、海の獵に物せむと思へば、船の出る處までおくらむと、獵銃、彈丸入、さては着たまふ簑、帽、ひるけのわりごなど用意し給ひて、まうけの馬車にのり給ふ。馬丁は馬のたて髮をなでゝ、今朝は朝とくより出でゆくをねぎら

ふが如く、馬は馴れたる父君に、手綱とらるゝを嬉しげなり。父君のかたへに、客人の君乗りまして、さはとのたまふ間もなく、車は門より走り出で、霜いと白くおけるに、わだちの跡のみ殘れり。父君の海幸あれかし、客人の君は船にて寒くおはさずやなど、母君と語りつゝ、門の内を流るゝ都川の岸づたひして、父君かへりまさば、夕げにまゐらせむと、老たる下僕によびて、めづらしき野菜ほらしなどしゐける程、馬のいなゝく聲、車のきしる音して、馬車を車やどりに入れつゝ、歸りこし馬丁はわれらの前に來りぬ。二方とも船にのりましつ。海はいと靜に、風も和ぎ侍りつといふに、いと嬉しうこそおぼえたりしか。

小さき籠に入れたる梅の花貝は、田越の浦の家づとなり。一昨年の夏、暑さをさけに二月がほど逗子に物したりし時、この貝はこゝならではなしと人々のいふにいとこまかきをゑりつゝ、日毎に拾ひあつめしなりけり。山深き里もなつかしからぬにはあらねど、すべて海のほとりこそなつかしけれ。さるは松の響波の聲は憂世のねぶりをさますが如く、見わたす限ひろ〲とせる海の面は、心もひろくなりたらむやうにて、われは常に海近き所を好むに、こゝに二月あまりをすぐしつるは、いと喜ばしき限りなりき。この籠この貝を見るにつつても朝とく海邊に出て、父君のすなどりし給ふを見つゝ、風涼しき貝砂路をふみし心地、夕つ方母君と共に櫻山を出る月にむかひ、田越川の船橋をこえて、鐙摺のわたりに逍遙せし樂しさまづ心に浮び出ぬ。又船にて葉山より夏島に遊びし時、父君の、かゝる歌よみつとて、きかせたまへりき。

相摸なる大海原の朝なぎに
　そびえて高し不士のとほ山

父君常は暇なくおはすれば、歌よみたまふ事かたきを、旅ゐの程などには、折々よみいでまして、われにもよめ

とのたまふ。この日も志きりにのたまふに、やう〳〵、

よせかへる波にうかべる不士のねは
　さもいさぎよくおもほゆるかな

例もいとふつゝかなるを、左に右にゆるぐ小舟のうちにて、いとゞよみえざりしは、いともやさしかりき。又虫おくりを見、濱なでしこをつみ、鎌倉にものしていにしへを忍び、横須賀におもぶきて軍艦を見し事、さては德富君の家の人々と、同じ船にのりて、稲村が崎由井が濱などをながめつゝ、江島にものしつる事もありき。歩みつかれていこひし木陰、船にゑひて笑はれし事など、思ひいでられていとをかし。

色あせて枝にかれつきたらむやうなる萩の小枝あり。こは鶴見の里に在りし比、折てきつるなりけり。こぞの夏、都の暑さ常よりも堪がたかりしに、都より程遠からで、汽車のたよりよく夏志らぬ境なりと人のいへば、父母君と共に、そこに移り住ぬ。その家は、停車場の前なる成願寺山といふ山のなからにて、杉の木立むらだちたる中にあり。朝夕の風うすものゝ袂に入りて、實に夏とも志らず、後は木立の緑涼しき山にして、前は廣き畑なり。畑の奥に鶴見の町、生麥の里見ゆ。そのあなたは遥なる海ひろ〳〵と見わたされて、ゆきかふ白帆の數もかぞへつべし。父君は、大方の日は朝とく東京におもぶきまして、夕つ方かへりませば母君とわれは、むかへまつると、日ごとに畑の中道をわけゆくに、夕ぐれの風、團扇もたぬ手にも秋をはこびきて、やゝ穂にいで初し薄の露にすがれる螢もいひしらず。日曜の日は、父君網をたづさへて鶴見川に至りましぬ。いつもえものゝ多かりしはいとも喜ばし。又夜中暁ともいはず走せゆく汽車の汽笛の聲きこえて身はかゝる片田舎にありとしもおぼえず。佛國にありし比、シユチーブの湖水のほとりに避暑に行し折、思ひ出らるゝよとのたまひて、父君のよみいでましつる

歌、
笛のねの志げきをきけばこと國に
　住しむかしの心地こそすれ

朝とく日の出ぬ前に起いでゝ、父母君とうしろの山にのぼりし事あまた度なりき。父君は双眼鏡をたづさへ給ひ、われは小犬をともなひ、母君は打ちゑみましつゝ、共に坂路をのぼる。いとけはしく苦しきを、のぼりはつれば、松杉櫪木など生たる林なり。下かげには、萩女郎花咲みだれて色香をきそひ、朝露にすがれる虫の聲いとかすかなり。むかひを見れば鶴見川は白たへの帶のごとく、神奈川の海は淺緑の衣のごとし。川の海に流れいづる所に、長き松原あり。松原の奥に潮田村の家まばらにみえて、うすき朝けの煙の細うたなびきたるが、白帆にかゝれるけしきいはん方なし、なつかしきこの林は、今もおもかげにうかび、汽笛の聲は耳もとにきこゆる心地す。あはれかの林よ。木枯にたへぬ木葉はいかに坂路をうづみけむ。露わけてたをりし糸萩は、おきむすぶ霜にうらがれてやあるらむ。なつかし。

皮の手箱のうちには、猶くさ〳〵の物いれてあり。今は世にいまさぬなにがし侯爵の君より給はりし小さき袋、姫君より給はりし藥玉のかんざしあり。蘆の湯にものしつるかへるさ、湯元にてもとめし挽物の爪箱あり。色よききぬのさいであり。紙にてつくりし馬あり。小さき人形あり。こはれしうでわ、栗の形したる文鎮あり。とり〳〵にそのかみ思ひいだされてなつかしければ、あまた度とりいでゝは獨打ちゑみつゝゐたりき。

世にたのしき事さはなるべけれど、まだ知らぬ景色よき所々をみるは、殊に樂しき事ならむかし。いにしへの女は境を越えずとかいひけむを、開けゆく御代の御惠とあつき父母の御惠に、まだ若き齢の程に、かくて

ゝかしこ行見る事を得しは、こよなき喜びにて、いとも〱嬉しき限になむ。唯おろかなる身の、此厚く深き父母の御惠に、報ひん事のかたきぞ口をしき。時計を見れば、はや十時も過て十一時に近し。さ夜風いたく吹すさぶに、近からぬ路を歸り來ます父母君は如何に寒くおはすらむ。風などひかせ給はぬやうにと、すびつの火をつぎ、湯をたぎらして、歸りまさばまづ殘しおきつるミルクに、紅茶いれてまゐらせむなど思ひをる程、お歸りといふ聲遙にきこゆ。やがて門のひらく音、車のきしり入る音きこゆ。急ぎ玄關にいでむかふ。奥の間に入りまして、父君も母君もいと樂しげに打ゑみませり。とりみだしたる皮の手箱に、くさぐさのものいれをへて、紅茶もて行しに、父君とりまして、こはゆきの御馳走のうまき事よ、おそくまでよくこそまちゐつれとのたまふ。母君も夜ふくるまで待ちていかに寒かりつらむとのたまふ。常にきゝまつる父母の慈愛の御詞なれど、御身の寒さはのたまはで、我身に心つけたまふ御心のかたじけなさ、今更に身にしみわたりて、あつく深き御惠の片はしにも報ひまつらむと、かくかきつゞりつるものから、たど〱しきわが筆のあとをいかにかはせむ。明治廿八年二月七日

前號の正誤　(二三頁の上)音も絕ては音も絕はて(二四頁の下)少女の卷は少女の卷(二五頁の上)一束は一束(同下)一夜は一夜(同下)駝鳥の羽さは駝鳥の羽れ(二六頁の上)何にかあらむは何をいふにかあらむ(二七頁の下)物語りたるは物語りうる(同)たまいりしはたまはりし(同)竹花どもは草花ども(二八頁の下)おもわを見しはおもわを見しは(同)おのがとくはおのがとゝ(二九頁の上)あまた度はあまた度。一度は一度(三〇頁の上)ローズわしはローズぬし。七年八年は七年八年の誤

誰が罪？

新平

風は身を切る冬の夜に　二人の子等はうろ〱と

凍えし足に霜しろき　道の面をたどりゆく
寒くしなれば家の影　軒の下をと傳へども
つたひ兼たるぬくもりに　指もわが身か人の身か
双手を口にまたは身に　押當がへど甲斐もなし
飢てやせたるからだには　暖みとてもあらぬらん
『姉樣べゞはあらぬか』と　なき目だちつゝ打問は
細き聲音に震ひつゝ　『となたにこよ』と引寄る
あはれの子等よ如何して　誰が身の果てか年の暮
世は金にのみあくがれて　誰を惠まん人もなし
火桶の隅も寒けれど　風をふせぐに便なり
妹は膝に姉は背に　打重なりてかゞまりぬ

姉の情に妹は　早すや〳〵と眠りけり
晝の疲に寒ささえ　身に覺えでか姉もまた
星のみ今は空高く　きら〳〵きらと輝きて
冴えし霜夜に遠ぼえの　犬の聲より聲も無し
やがてつき出す百八の　鐘にあけゆく春の空
人の心も改玉の　歲はかへりて來りけり
歲はかへりて來りしが　二人の子等は如何して
氷りし溝の石の上に　殘はあだしからだのみ
あはれと人はながむらん　霜に白らけし其の姿
樂しと子等は行きにけん　霞たなびく天つ國
神の御膝に今頃は　ありてやあらん姉弟が
咋日の憂さを忍ひつゝ　今日のたのしさ語つゝ

家政

家庭の教育

德育につきての心得

或る一人の貧諸生ありき。身のなり行きをつら〳〵と考がへけるが、是れぞと思ふ善き職業もなく、さらばとて勤勉刻苦、朝に星を戴きて出で、夕に露を蹈んで歸るの勞役を爲さんとするの心もあらず。下宿料は已に五六ケ月負債となりたれども、償却の道は未だ百里の先きにも見へず。毎日毎夜机にもたれて、うつら〳〵と考へ思ひ亂れしあげく、不圖一個の考へや浮びけん。輕やかに坐を立ち、破履を穿がちて何くともなく立ち行きたり。

茲は掏摸、盜賊の巢と聞こへし、〇〇町の、然かも其親方と知られし、某の家の前にて前の書生は足を止めしよと見る間に、手は已でにその家の戸を開らきて、案内の聲と共に内に入り、何にか主人に談ずる所ありき。暫らくして、主人の聲して云ひける樣、『御身は敎育を受けしことありや』『然り』と、『それにてはとても好き掏摸にも盜賊にも成ることは出來ざるべし。それよりは、未だ年齒も行かざれば、今より何にか一事業企てゝ、專心一意心を盡くせば、成功すること決して難からじ。茲に金二十圓あり、之れにて何にても正當の事業を營なみ給へよ』と書生の返事は聞こへざれども、門を出づるとき、頭を垂れ、目に涙ぐみて、幾度となく大息しつゝ、二三度も其家を顧みたる樣、何か非常に感じたる樣なりき。數年の後日本橋に一の呉服店起り、正直を以てあまねく信用を受け、日を增し繁盛に赴けりと。こは先きの書生が、改悔の結果にてありけりと、後にて知られけり。

こは余が幼なき時に聞きたる談しにして、眞僞は保し難たしと雖も、兎も角も好き盜賊とならんには、敎育が最も害なりとは、誰れも云ふ所なり。間々敎育を受けたるものが、大罪惡を犯かして、人の心を寒からしむることなしとせざれども、かゝる人はその裏面より眺がむるときは、其原因忽ち明らかになるべし。即ちその原因と云ふは、大抵父母の甚だ不良なるものありて、之れが性質の傳染せるものか、然からざれば敎育の方法を誤まりて、單に狡猾なる智慧のみの發育に、心がけしこと其の原因なりしならむ。

されば父母が辛苦の汗を流して、數萬の財産を作り、其子の敎育の資本と爲し、さて出來上りたる結果は、如何にと云ふに、たゞ父母の心を傷ましめ、社會の厄介物となり、自らも恐ろしき一生を送るに過ぎざるの大不幸に至らざる豫防法は、德育に力を盡くすにあるのみ。

德育に二たつの法あり。消極的と積極的なり。消極とは友人との交際は、惡しきことを習らふの恐れありとて、これを禁じ、小說は惡しき志想を養しなふの危險ありとて、これを節せしめ、凡ての事、過ちの起こらざる樣にと、注意することにて、積極とはその小兒の性質の、中にて、賞むべきもの、感ずべきものあるに隨がひ、その良性をいよ／＼發達せしめ惡風の入らんとするも口なからしむる也。德育にかぎらず、凡て敎育には、消極と積極との二たつを、交も／＼調合して用ゆること必要なりと雖も、德育に於ては、此事特に必要也。

然るにこゝに甚だ困難なることあり。智育には或は器械あり、書物あり、方法至らざる所なけれども、德育は器械の能く敎しへ得る所にあらず。書物の功も亦た甚だ渺すし。それのみならず本人の生れつきの次第によりて、敎へずしても善良なるものあり。敎へても一

向響かざるものもあり、智識は一度ならひ得たる所は容易くは失なはざれども、德は父母が折角の敎育も、友人により、境遇によりて、容易く飜るがへさるゝこと、波上の萍の如し。故に最も德を備なへたる母が、朝に、夕に、言葉に行ひに、深く小供の心に感化を與へ根の深き喬木が、容易に風に動かされざるが如く、習ひ性となる迄に植へ込むより、良き方法はあらざるべし。

人の性は元と善なりと云へ、否な悪なりと云ひて、古より學者は大議論をなせり。何れが眞か僞かは、その論者に任するも、大抵の小供が、小さき時より愛心ある父母に育てられて、愛に長ぜざるはなく、温厚なる敎育を受けて、温厚ならざるはなく、信實を見習ひて、信實に富まざるなきは、稀れなり。凡べての德の中にても、殊に愛は最も根本にして、父母を愛するものは、兄弟友人に深切に、國民としては善良温厚なる愛國者となり、自利自慾のために、途を過またざるべし。』

愛は凡べての德の帶なりと聖書に云はれたるは、千載磨せざる名言と云ふべし。然かれども愛心を養しなふにも方法あり。假令ば漫りに他人に物を與へて慈善と爲すが如き、習慣を養なふときは、同情の美質は發することなくして、唯だ人の禮を云ふを喜ぶ一種の諂諛づきと成るが如きことあり。故に或るときは慈善心を、小供の快樂心に訴たへで、養はしむることの必要なる時もあれども、善は必ず快樂のためになすにあらずして、義務、責任の上より、いやなる時にも、爲さゞるべからずと云ふ、強き意思を養しなわざるべからず。又た時には自分のために、人に善を爲すことを敎ゆることあり。これは性質弱くして、進取の氣性なく、善にも、悪にも、弱き小供を勵げます時に用ゆべき方法にして、天性非常に弱き小供には、功名心の如き、敵

慨心の如き、强き鼓舞を與へて、その眠むりを覺し、その刺激にて目醒めて後は、漸々に高尙なる望みを起こさしめ、完全なる道德に進ましむることを忘るべからず。意思の弱わき小供には、格別消極的の敎育に拔け目なく注意し、少こしにても試みとなるべき惡しき書物、友人、談話、物品等に近づけず。一方には善き友人を撰らびて、交際せしめ、良き書物を讀ましめて、之を手本となさしむる等、積極的の敎育をも怠たるべからず。

要するに敎育の内、最も大切なる德育は、消極と積極の法を適宜に調合して健全なる强固なる德性を養しなふことを最も必要とす。

老人養後の時候

育兒のことは、人々多く注意して、研究を怠たらざれども、此頃の如く時候變化多くして、病人多き時には、薄弱なる老人が健康にも、一きは注意を加へて、養護するにあらざれば、其生命の大分を損じ長がく孝養を盡くす能はざるの不幸に遇はん。

（一）食物のこと

老躰の、最も謹しむべきは食物にあり、運動よりも、遊興よりも、藥よりも、淸潔よりも、最も直接に關係あるは食物なり。若し惡しき持病なくして、食物に通常の注意を加ふるときは、古來稀れなりと呼ばれし、七十はものかは、九十、百迄の長壽と云はるゝ年齡は平坦なる道を步むが如く、平氣にして過ごすを得べきは、疑ひあらず。若年のものと雖も、過食は身躰に害あるが、まして薄弱なる老人のためには、之れぞ最も恐るべきの結果あり。されば食物は量を少くして、度を多ほくし、固きものは、避け、小供を扱ふごとく、碎くか切りて與ふべし。中にも老人には、往々食ぎた

なき性質のものありて、何にかぎらず物ほしがり、終日食の口に絶へざるものあり。これは傍らより節せしむるにあらざれば、如何に強固なる身躰なりとても、中々にたまるべきものにあらず子の責任として、最も注意すべきは是れなり。次末には夕食の時間を早やくして、食後は少なくとも、一二時間談話、もしくは運動せし後に就床せしむべし。元よりその食物の種類は、淡泊にて、滋養多きものを少しづゝ與ふるの可なることは、云ふ迄もなし。老人を喜ばせんとの考へより、遂々悪しゝと知りつゝ、口に美なる菓子等を多く與ふるは、反て不孝と云ふべきなり。

（二）睡眠のこと

老人に多くの睡眠の必要なることは、油の切れたる器械を休ましむるが如し、若き時より、勞働になれたる躰には、屢々老て後迄も、世話好きとなり、家の内外の事にかゝわらず、骨を折り自ら過度なるを感ぜざることあり。されども過ぐることの悪しきは、後年に至りて及ぶべからざる後悔すべき結果を顯はすべし。故に之れを休ましめ、神系を勞からしめざるには、安眠よりよきはなし。安眠は萬事より、彼れを離れて、神系を靜めつかれを來たらざらしむ。

（三）運動と温度

知りたりと云ふ人は、耳を覆ひ、目を閉ぢて讀まざるも可なり、去れども世には知れきつたることをも、忘れ、もしくは氣の付かずして、すてをくことあるが故に記さゞるべからず。少年は風の子、老人は火の子と呼ばれて、老ゆれば老ゆるほど、火のほしくなるは、蓋し自然の結果也。脂肪も少なく、躰も勞れ、云はゞ燃すべき燃料少なくなりし老人には、温暖の必要なるは、無理ならじ、さりとて、炬燵の邊計りに、懶く坐す計りを以て、温を取るの最も好き法とは云ひ難し。落ちんとする日を、僅かに保てる弱躰は、空氣の

清き、温暖なる野原に、杖を引きて、變りたる空氣を吸ひ、景色を見ることは、食に次ぎたる要用なる法則なり。

(四) 慰さみ

末永からぬ老人を、如何にして慰さめんかと云ふことは、孝子ならぬも、子として心を煩わさゞるは少くなし、或は好きなる芝居も可なり、或は小說を讀み聞かしむるも可なり、新聞の談しを爲すも可なり、然れども餘り神系を激し精神をはげますが如き類のとは、心して避くるを可とす。老人は大低、小供に近く後もどりするものにして、たゞ人の好意を以て取り扱つかふを非常に喜ぶものなるが故に、温順、和語は最も彼を慰ぐさむるの道なり。大低の老人が、その過去の歴史を操り返して、喜び慰むは云ふ迄もなく、面白くもなき、その歴史を聞くの忍耐の、如何に彼を慰さむるかも、亦た人々の能く知る所なるべし。

(五) 清潔と藥

俗說に随がへば、何は根の藥にして、老人によしとか、之れは眼力を强よむるに益ありなどゝ、親を思ふの餘りよりして、つまらぬ事に迷ひを生じ、反て彼が天然の生命を人工にて短かむることあり。これは心得べきことにあらずや、只だ常々心がくべきことは、破れんとする器具をあつかふが如く、大切に要心すべしと雖も、變に應ずるには、醫師の命を待つべし、呉々賣藥等は爲すべからず。

次ぎに寒むきときに忘すれ易すきは、清潔を守ることなり、温室爐の設なき家にては、少しく困難なれども甚だしく熱つからざる湯にて、屢々身躰を拭ひ、温かくして休ましむることは、最も其の生命を長く保つの道也。

化學の遊び

摩擦電氣の試驗

(一)煙管よせ　懷中時計を平らたき卓子の上に置き、其の硝子面の凸かくなりたる中央に、煙管の中心を、程よく平均して安置すること圖のごとくすべし、さて別つに硝子のコップを持ち來たりて、其口を絹のハンケチの上にて急に磨すり、少しく温か味を感ずる位に至りたるとき、一寸火上にて焙るべし。さてこのコップを煙管の吸ひ口の所に近づくるに、摩擦によりて電氣を發せるコップの口は、煙管を吸引して、コップの動く方に煙管を動かしむること、さながらその二つを糸にて繋ぎ合はせたるが如とし。



(二)一寸先きの紙片を中に引き付く　封蠟とて、瓶の口を封するに用ちゆる蠟を、藥屋にて求め來り、布片かフランチルの温ためたる片の上に擦り付けて、蠟の温かくなりたるとき、紙の小片か、綿くづか、燈心か、毛類の如き、極わめて輕きものに近づくるに、隔たること一寸許りにして、役者はポン、ゝと飛び上がり、蠟に附着する樣、實に奇らしき見ものなり。

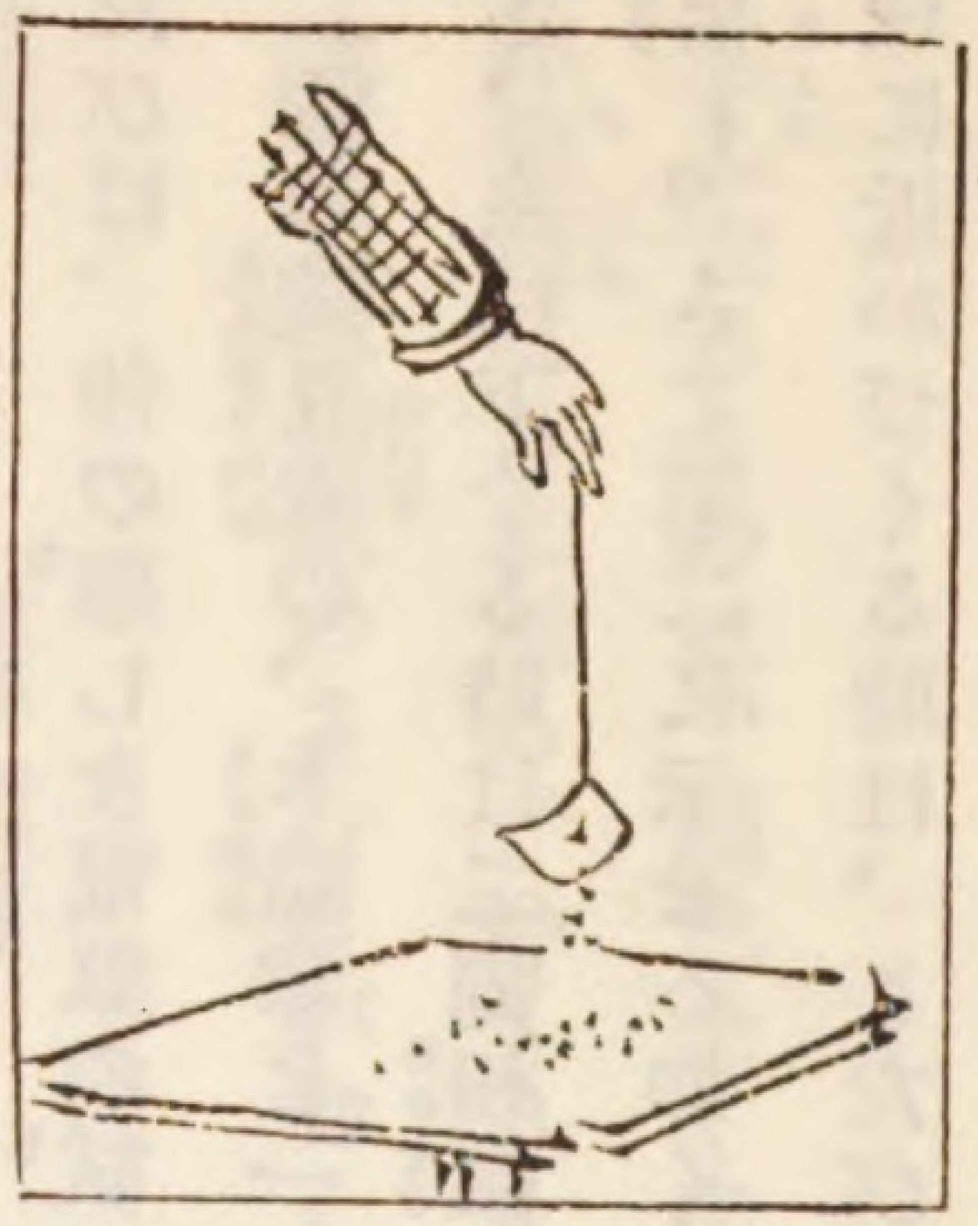


(三)壁と洋紙　通例の洋紙を、二三寸四角に折り、火鉢の上にて焙ぶりて、洋服着けたる人の脇の下に狹さみて、引き出だし、又た焙ぶりては、狹さむこと數回なる時は、紙片の兩面一時に、磨擦せらるべし。これを壁に向かつて擲げ付くるに、壁は慈母が愛子を抱き

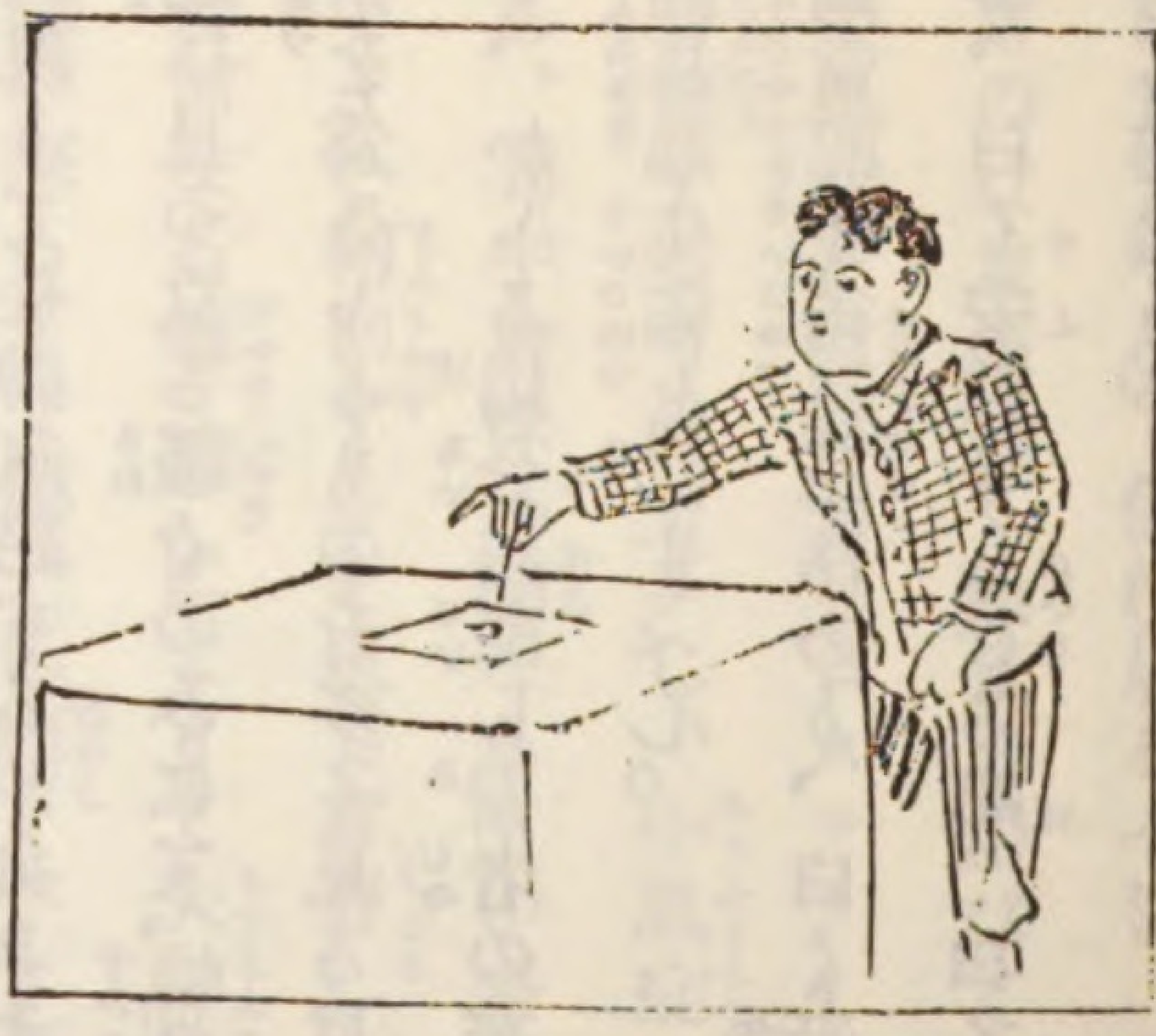
しめたる如く、堅たく抱だきて落とさゝらしむ、其様無學の人をして化物屋敷と呼ばしむる足るべし。



(四)又た一法　洋紙の一片を温めて磨擦すると先きの如くし、充分電氣の起きたるとき、その一と隅を糸にて通し、空につるし、下たに毛類等の如き軽きものを置くときは、毛は紙の兩側に飛び上りては、飛び下り、又た上りては下る様、小女が球をつく様の如く、實に奇異なる様を顯わすべし。



(五)球ころばし　成長したる強固なる木の心臓を以て豌豆大の小球を造くり、洋紙を焙ぶりて磨すること、先きの如くして、平面なる卓子の上に置き、その上に先きの小球を上すときは、球はする〳〵と轉じて、紙の端より端に滑べるべし。此のとき、針の先きをその球に近づくるときは、球は又た轉じて紙の他端に走しるべし。又た針を向くれば又た他端に走しり、恰も生ける球を見るが如とし。



(六)糠の小躍り　二個の書物を取り、各々一寸計り隔てゝ、卓子の上に置き、その相對する一方は豫じめ火上に焙ぶり、その二個の間には、糠を置き、別に硝子の板を火上に焙ぶりてフランチルの片にて磨

擦し、其の面を下に向けて、書物の上に橋の如く渡すときは、糠は世話しく躍り始むべし。

（七）押合ふ二個の球　こたびは、仲の惡しき電氣の試驗を説くべし。これには二個の豌豆大の、木髓球を一二寸の長さの絹糸にて繋ぎ、糸は下ぐる時は二個相接する樣に、同じ寸なるを要す。さて第二に示せる如く封蠟を温め、磨擦して二球に近かづくる時は、こたびは球と、球と、相衝き合ひて、足をひろげしが如くなるべし。

（八）最も手近き一方　小學校の幼年生徒にも爲し得べき、最も、簡易なる一方あり、即ち學校にて用ちゆる西洋紙の一片を、火鉢の上にて焙ぶり、指の爪にて温かき紙面を擦すり、爪の熱して堪へざるを度として、燈心の小片毛類の上に近かづくる時は、口鬚の生へたる如く紙に着くべし。

醫者の來るまで

(What to do While Waiting for the Doctor.)

人誤りて失神氣絶するが如きある時、傍人は徒に驚き迷ひ且つ立ち騒ぐのみにて、速に之を起生せしむるの術を爲さゞるものを多く見るは甚はだ遺憾千萬ならずや、かゝる場合に際し醫者の來るまで施すべき二三の簡易起生術を記すべし。

通常起生術に三法あり、曰く新しき空氣に觸れしむる事、曰く安臥せしむる事、曰く首腰等の束帶を解き弛むる事なり。

惣して病人の失神する有樣は、始め輕き眩暈を覺ゆると同時に顔色蒼白となり、終に身體凝冷するに至るもの多し、斯る場合には其人を臥床か床の上に仰向に安臥せしめ、空氣に曝すか、煽りて風を送り、之にて蘇生せずんば、少許の冷水を其面に吹きかくべし、左な

くば絶息者の鼻に「アンモニア」又は「アルコール」又は松脂の如きものを當てしむべし、此外非常に強く香氣ある香料は、偶々以て人を蘇生せしむるに足ること珍らしからず、此の外に良法は芥子泥か、熱布か、熱湯を盛りたる嚢を鳩尾(胃の上)の部に押し當て置くも亦治療の術を得たるものなりといふ。

腎臓病によりて失神すれば痙攣の如き若しくは強き昏迷を起して倒れ、眼瞼腫れ脚部も亦腫れ上るに至るべし、かゝる時は一分間の猶豫なく醫者の來診を急ぐべし。

若し爛酔によりて精神を失ふたるものは、顔色全く赤色を帶び瞳子膨大し、身躰弛緩なるに至る、かゝるものには一聲高く呼べば其人は再び睡眠のさむるが如くなるべし。

頭部に破傷の跡なく、瞼眼を蔽ふも瞳子針頭ほどに收縮したるものは阿片中毒なるを推斷し、又一方の瞳子膨大となり一方の瞳子は收縮したるは腦病の一種なることを斷定し得べし、是等の兆候なく面部の一側弛緩し其一側の皮膚擴張を見ば中風症が或は腦充血なるを斷定し、勿論速に醫師の診察を乞ふべし。

癲癇病により失神したるものは口に泡沫を吐き、唇又は舌を噛みて倒れ居るべし、中暑によりて失神したるものは皮膚悉く熱氣を帶びて乾燥せり。

中風症と氣鬱病(ヒステリーと稱す婦女の病)により昏倒するものも多し、中風症は大抵半身は自由なれども、其半身は不隨なるもの多く、氣鬱病は眼球をクル〳〵と轉回するを以て其著しき兆候と爲す也。

如何なる病症によりて失神昏倒するに係はらず、醫師の來るまで第一に施すべき良法は、病人を少しく枕を高くし靜に安臥せしむるにあり、而して鼻に香氣を嗅せ微弱なる呼吸を爲せるものには身體を温暖にし、頭を冷却し(氷嚢か濕手拭もて)熱き茶か珈琲を用ゆ

るも妨げなし、夫の癲癇症の如きは腦部に於て一時血液の欠乏より起るものなれば、これによりて昏倒せんとする時は傍人は少しも騷動することなく、靜に病人の手を押へ、口中には布帛の切端を挿みて舌を嚙まざるやうにし、仰向に安臥せしめ成るべく靜穩に爲し置くべし、氣欝病者には成るべく親切且つ靜穩に取扱ふべし、中風によりて卒倒したるものにも成るべく靜に保持ち氷嚢にて充分頭部を冷しつゝ醫師を待つべし、小兒には能く痙攣を起る、これは胃の不消化と乳齒の生ゆるに原因す、其兆候は一部又は全身の痙攣を起し、眼球回轉若しくは偏視し、甚しきは上部に走りて眼球口は白膜を見るに至る、かゝる場合には其小兒の頭部を冷却し身體は温暖に保ち、芥子湯に浴せしむるも亦可なり、食物の不消化より來れると推斷せば指又は羽根にて喉頭をくすぐりて悉く胃中の物を吐出さしむべし、頭部の毆打顛落若しくは脚部又は臀部の壓落によりて腦の激動を起し顏色蒼白となり昏倒するに至るものあらば靜に臥床の中に横しめ、窓、障子なんどを開放し充分新鮮の空氣を入れしめ醫者の來るを待つべし

成年と結婚

家庭叢書記者譯

西洋の家庭雜誌に『成年と結婚』(Young Mem And Matrimony)なる一文あり、悉く日本の事情に適するや否やは知らざれども、亦一讀の値なしとせず、則ち之を譯す)

男子廿八歳又は卅歳に至り、充分健康なる身體及正確なる心を有するに至れば、正に結婚すべき時期に達す、余は次の注意を是等の成年諸君に呈すべし。

第一に避くべきは從弟同士又は近き親類間の結婚なり其の忌むべき證を擧ぐれば施濟館(Charitable institutions)の統計表に據るに、聾者、啞者、盲者の多數、癲

狂者の多數、白痴者の多數は親類間(從弟同志等)の結婚に出でたる子孫に係はるといふ。或博物學者が此事情を取調べたる結果に、不具子孫九十五人に係はる十七の家族中、四十四人より多くは白痴、十二人は瘰癧者、未熟者、一人は聾者、一人は侏儒なりし、而して其中の九家族は、悉く白痴者瘰癧者にして、八人の子を有せる一家族のものは悉く白痴者なりき、其原因は上に述べたるが如く親族結婚に出たるなり豈恐れ且謹まざるべけんや。

男子より年齢六歳の以下の配偶をめとるべし、其男子が充分成年に達したる年齢ならば(譬へば廿八歳乃至三十歳)其の女子も亦充分健康なる體格を有し、且つ遺傳性の血統を脫することもあるべし。

無學又は悪しく敎育せられたる女を避くべし、悪しく敎育せられたる女は唯表面上の才能を保つに過ぎず、譬へば外國語の聞かぢり、又は唱歌を好み舞蹈を嗜むの類なり。

又生かぢりの學問よりも家政上に係る實用の敎育を受けしものを撰め、而して見よ、彼女は「ピヤノ」と「オペラ」の遊藝に達するだけ料理の法を知るや、彼女は舞蹈に巧なる程彼女の靴襪を補綴し得るや否や、而して彼女は種々なる才能を有するだけ寢床を製し衣服を裁縫し得るや否や、男子配遇を求めんとせば多きを要せず、唯だ彼女は家事を整理する才能ありや否やを知るにあり。

唯だ外面上の面貌の美麗なるに惑ふ勿れ、面貌は眞實の妻たるに必要なるものよりも、多くの他のものを隱すを知らずや、顏色の美は僅少の間なり、忽ち凋落して見る影なきに至らん、然れども心情に智惠ある女の美は常に歡樂を以て歳と共に發達全備せん。

衣服に驕奢なるは避くべし、派手に衣服を着飾る婦人は、大率其身體に於ても精神に於ても美ならず。

怠惰なる婦人は必らず避くべし、人はかゝる妻女に彼の幸福と將來を任ずる前に再三の熟考を要す、若し這般のものを迎はゞ、假令如何に莫大の收入と雖も、怠惰放逸なる妻女の驕奢と浪費の爲に蕩盡せらるゝを覺悟せざるべからず、而して怠惰放逸なる婦人は大抵氣短にして怒り易きは斷じて疑はず。

兩親に不敬愛の婦女を避くべし、小兒を好まざる婦女を避くべし、宗敎心なき婦女を避くべし、家庭の團欒を好むよりも、外に出でゝ舞蹈、群遊、冗言を爲す婦人を避くべし。

妻女を撰擇する緊急の要は、其婦人の平生の品行に注意するにありと知るべし

社交一斑

流行の栞　　春夢

流行の起る源

世間に流行品の行はるゝ原因につき諸君と少しく物語りすべし、如何にして流行するか其重なる原因の二三を擧ぐべし

衣服にても髮具にても履物にても有名なる人が用ゆれば（譬へば俳優、藝人、藝人の如き）世間は忽ち之に傳播することの迅速なること還動して命を傳ふよりも速なり、譬へば團十郎が或品を好めば世間忽ち之に雷同し、新駒が或品を好めば世間忽ち之に雷同し、菊五郎が或品を好めば亦世間忽ら之に雷同す、即ち牡丹の世に行はるゝ、三升の世に流行する、或は梅幸茶と言ひ或は福助結びと言ひ、俳優が常に好むものか、若しくはそれを用ゐて舞臺に出でたるより忽ち世の流行品となるなり、故に今日流行品の出づるは重に俳優藝人等其源を爲す、これは今世に限らず古も其通りなり、又流行の出づる敢て俳優藝人等のみにもあらず、元祿の頃『相撲櫛』といふもの盛に世に流行せり、それの源は兩國梶之助といふ有名の相撲取（因幡出產、丈け六尺一寸五分、重さ四十貫目ありしとぞ）此櫛をさし始めしより大に世に傳はりしといふ、又其頃前髮ある相撲取櫛をさす事流行し、鬼勝象之助（紀伊出產、丈け七尺三寸重さ四十貫目ありしとぞ）顏面に白粉を塗り、二枚櫛をさしたりしとなり、『相撲大全』といふ書を見るに、其頃前つけといふ手を取る事流行しけるが、彼等はこれをつたなき業とし其手をさらざる證迹

こして櫛をさしけるとぞ、『文蓬莱』といふ書に鬼勝を悼める句あり「つひの世は土山櫛を相模取」(沾徳)と相摸取が櫛を用ゐこれより『相相櫛』が元祿年間の流行品となりしを知るべし、又茶道家にても千家と言ひ遠州と言ひ有名なる人が新奇なる事を始むれば世は忽ち之に倣ふ大工左官石屋屋根屋にても書家にても畫家にても文章家にても有名なる人が新法新案を出せば、世は忽ち之に同化す、流行の起る源は決して俳優藝人等に限らざるなり。

然しながら衣服、髮具、履物等に至りては、大抵俳優藝人より出づるを多きが如し、此故に機敏なる流行製造家は是等の人物を利用して首尾克く其流行品を世に行はしむ、其方法は有名なる俳優が舞臺に出づる時之を使用せしめて『音羽屋好』とか『福助好』とか名づけ、或は之を其俳優に頼みて見物人に撒布す、これ廣告の一手段のみならず、又俳優の感化力を以て人の心を生捕にする所以なり、寶暦の頃の一才士天竺浪人平賀源内が流行品を製出し之を世に廣めんと種々に心を苦めたる一事蹟を記して、流行品が何によりて起り、何によりて傳播するかを證すべし、但し蜀山人太田南畝の平賀鳩溪實記に據り、源内櫛(岩非櫛ともいふ)流行の次第をお目に入るべし。

源内は種々心を配りて、兎角世上へ流行事を工夫しけるが、フト思ひつきて、長崎より多く持參したる伽羅を取り出して、之を以て櫛に挽かせ銀にてむねを一分通りに覆輪をかけ之を世上に弘めんと、當時吉原にて名高き遊女丁子屋雛鶴にさゝしめて大に目的を得んものと日頃懇意にする一瓢といふ幇間を招き夫の雛鶴に面會したき旨を委頼したりければ一瓢早速承知し、先方へ通し日限を定め一瓢の家にて逢ひたり、其節源内は雛鶴に向ひ今日は此上なき大慶なり、今日の悦何ぞ進上申たけれど、差したる土產もなし、これは近頃麁末ながら先年我等長崎表より持參せし、伽羅を以て態々ひかせし櫛なるが、用立てゝくれられなば大悦至極なりと述べければ雛鶴大に喜び遠來の名器實に匂ひゆかしく候、以來は他の櫛は用ゆまじと受け納め、終に生涯此櫛を用ゐしと也、源内が何故に雛鶴を一顧せしか、これ源内が計略の存する所にして、唯贈るに於ては流行させんが爲にしたりとの評を受べし、故に遊興に乘して遣はしたりとなり、然るに其後源内の計略に違はず、其風の櫛大に世上に流行し、田沼奥向にては殊に甚しく、傳を以て源内方へ申し來れば、源内は念を入れて拵へあげ、これを緣として心易く出入したり、其後は紫檀、黑檀、或は鼈甲、木櫛の差別なく、銀むねをかけたる櫛をば源内櫛とはいふなり、或は源内兩國邊に遊行せし折柄群集の女ども大かた銀むねの源内櫛をさしたり、櫛内は心中大に喜び我

爲すこと悉く圖に當り、此分なれば大願成就と勇みたりとなん。

流行事は社會の潮流又は好尚を代表す、譬へば昨今の如き日清戰爭によりて軍國となる節には、孰れも日清戰爭に關係あるもの、又は勇武なる流行品行はるゝ事實は余は前々號にも記載し置きたる如きなれば再述の要なし。

便利なるもの、實用なるもの、廉價なるもの等流行の原因となれども、世に多く行はるゝは却つて贅澤品、驕奢品にあるが如き觀あるは嘆ずべし流行品は便利、經濟、實用なるを嘉みすべし。

お高祖頭巾

お高祖頭巾の流行は昨冬の本紙上に記したり、本年も一月より此流行益々廣く、苟も婦人外出の時には頭巾と肩掛を着用せざれば世間に慚色あるが如き趣あり、筆の序にお高祖頭巾の濫觴を記せば『獨語』といふ印本に曰く、江戸の婦女外に出づるに昔は氣儘とてくろき絹にて頭面をつゝみ、目ばかりをあらはしけるが、其後綿にて頭面をつゝみしは我廿あまり、寶永の頃までしかなかりき云々と言へり『五元集』に其角の句を載せたり、

　目ばかりを氣儘頭巾の浮世かな

蓋しお高祖頭巾は此きまゝ頭巾の遺製ならんか、後考を俟つ。

流行の洋服

流行界は復古の傾向あるより洋服は大に勢力を失ひし如くなれども日清戰爭以來は再び又洋服着用者目に立てり其故は文武官の各地に往來するもの多く此れ等は何れも洋服を着す又陸海軍にては軍人軍屬の制服を新製せらるゝもの又は一般人民に於ても洋服の勇風あると輕快なるとを好みしによるならんか扨昨今の流行を聞くに紳士向の常服は多く「フロックコート」と定まり「モーニングコート」は大に減じ縞地背廣と同じき勢を以て紺の子ルトン地の背廣行はる又其の直段を聞くに概して昨年より一割二三分の高直にて此れは前述の如く事業の多忙と一には銀價下落の爲に輸入品の騰貴に由るものなり其の直段は大畧左の如し●背廣（紺の子ルトン地に堅縞のズボンとも三ツ揃十四五圓位にて兩前ともボタンの二行なるもの多く行はる●「フロックコート」（表は一本綾羅紗の襟大にして長き方裏は黒の毛繻子にてズボンは堅縞羅紗にて近き太き方流行し十八圓位より三十圓位まで）●「モーニングコート」（地質はフロックト相類し代價は十五六圓より二十二三圓まで）●「オバアコート」（表は茶の無地羅紗最も行はれ之に次ぐは玉羅

紗にて裏にに縞セル地多く袖裏は概して縞甲斐絹なり玉羅紗なるは雨前パンドウ(帶)つきにて價は十八九圓より二十七八圓位まで)●角袖オバアコート」(近來被布の如くに仕立てたる角袖オバアコートを男子の着するもの往々に之れを見る地質は黒羅紗又は甲斐絹にて代價十四五圓より二十二三圓まで)●學校制服(近來一般に紺のヘル地にて七圓位●士官外套(紺地の軍艦羅紗にて九圓より十二三圓なり而して現今洋服の地質中軍艦羅紗最も拂底なり此れは軍人用に用ゐらるゝこさの多きに由るこぞ)●燕尾服(黒無地羅紗にて二十二三圓より三十圓位まで)●二重廻し(地は表スコッチ縞綾甲斐絹又は毛繻子の總裏に十七八圓より三十圓位まで)

幽禪染及羽織裏地

流行社會に日清戰爭の影響を受けたるこさ實に是迄報道したるが如し、幽禪縮緬にも此風あり、粹さか通さか申す人の襦袢の袖又は一種社會の長襦袢に用ゆ又羽織の裏地に襦珍織の日清戰爭又は福島中佐雪中旅行を織り出したるものを用ゆるものを見受くるが其織方實に種々の彩色を加へ精巧此上なし、併し價の安からざるものなれば汎く流行の勢力を得るや否や

日用品物價(二月十九日)

◎白米(一圓に付)一等白米七升八合●二等白米八升●三等白米八升五合●四等白米八升八合●五等白米九升二合

◎雜穀 ●南京白大豆一斗八升五合●同靑大豆一斗八升五合●同鄕色小豆一斗四升三合●同白小豆一斗五升●八戸大豆一斗八升●粕壁鄕色小豆一斗四升五合●目無白さ一斗二升●水石大豆一斗八升●南部大豆一斗八升二合●越後大豆一斗五升五合●室蘭黒豆二斗

◎鹽 ●赤穗三俵九分●大鹽井に八家四俵〇五厘●本齋六俵二分五厘●新齋七俵二分

◎砂糖 ●稀車卅二匁七分●次三十二匁●新台安十六匁四分●次十六匁六分●呂宋十六匁八分●花見所廿七匁五分●初雪廿六匁八分●天光廿六匁二分

◎種油 ●胡麻十一圓三十錢●桐油七圓七十錢●荏油十三圓八十錢●地水九圓十錢●久ト九圓八十九錢●非桁九圓九十二錢●星印九圓九十八錢●一川九圓九十三錢●坂箱九圓八十錢●イ印九圓八十五錢●チヤスタ一圓八十六錢七錢●タンク一圓八十七錢●ホーキ一圓八十六錢七錢

雜錄

思想一斑

◎戰勝後の敎育(同志社文學第八十號森口喜之助氏)

戰勝後の敎育に取るべき方針の重なるもの二つあり、

一を兵商敎育と云ひ、他を世界的敎育と云ふ、而して二者相待て決して離るべからざるなり、蓋し十九世紀の兵は封建時代の兵にあらず、十九世紀の商は封建時代の商にあらず、封建時代に於てこそ牙籌と朱鞘とは兩立せざれ、第十九世紀に於ては兵船商船齒牙の如く相離るべからざるの關係を有す、二者相待て初めて進歩を見るべきなり、故に十分兵商敎育を奬勵して、其上に世界的敎育の方針を取らざるべからず、從來東洋の僻端に孤居せし島人的思想を一擲して、世界の舞臺に於ける日本國民として、世界の文明場裏に於ける日本國民として、人類の進歩に對し大なる使命を有する大國民として敎育を施すにあるなり、

◉**不幸なる軍夫の子を救へ**（少年世界第三號）

軍人死すれば相當の恩給を給せられ、遺族由て以て兎に角衣食に窮せざるを得べし、去れど人夫は如何ぞや、當人一たび死すれば、よしや多少の手當は得ても、固より些々たる額にて、其の寡婦と孤兒とは忽ち路頭に彷徨するの慘狀に陷らん、又た出征軍人の子供には、或は無月謝にて敎授する學校あり、或は月謝を支給する團躰多けれども、未だ從軍人夫の子供の爲めに月謝を給し、若しくは無月謝にて敎育する團躰學校なきにあらずや、且つ出征軍人の家族には金を醵し物を集めて月々分與する有志者あるも、人夫の家族には、斯る恩惠に浴するものなし。

其報國の志同じく、其の國の爲めに艱苦辛酸を侵すと相同じきに、其の家族、別して其の子供等の幸不幸斯の如きは、痛惜すべし、少年諸君若しその心あらば、請ふ諸君の父兄に訴へて其の救助の道を立てしめよ。

◉**日清戰爭と美術**（世光第二號、東外生）

上乘なる美術は高大深奧なる觀念を、最も巧に形躰の中に宿らしめしものなり、日本人が形式に於て殊に巧

なるは、歴史の證する所なるが、之に加へて、今や戰爭の結果として、高大深奧なる觀念に滿たされんとす此未曾有の盛時に際して、未曾有の傑作が美術の上に續々顯はれ來るは、理の當然なり、余は日本人が成長進歩する自然の結果として、其然からんことを切に望む、願くば、誇らず驕らず、愼重に天職に向つて進め、

◉女學界の躰育論（女學雜誌第四百六號）

先づ福澤諭吉氏の女子躰育論、井上毅氏の女生筒袖論の喜び、千葉縣敎育會に於ける某氏の非女生運動論の如き、關西某女學校の女生躰操捐ニ顏色一論の如きが追々消滅したるを喜び、細川潤次郎氏の華族女學校運動會に於ける演說、及び女子高等師範學校長篠田利英氏が女子の高等敎育は其の健康を害せず（運動さへすれば）との演說を大に歡迎せり。

◉學齡兒童百中の就學（統計集誌第百六十二號）

明治二十六年十二月三十一日調

東京	六〇・七一	神奈川	六三・一一	新潟	四九・六〇
埼玉	五〇・九三	千葉	六〇・一三	茨城	五五・四八
群馬	六六・二一	栃木	六一・六八	靜岡	六六・八三
山梨	五九・六七	長野	六五・二四	北海道	五四・四九
宮城	六六・九一	福島	五九・五七	岩手	五七・四一
靑森	四五・一五	山形	五七・四六	秋田	五一・四七
京都	六四・八九	大坂	五七・三八	兵庫	五五・七六
奈良	六九・六六	三重	七〇・八八	愛知	五六・五〇
滋賀	七〇・三〇	岐阜	五九・九〇	福井	五七・四六
石川	七二・二三	富山	五五・八七	和歌山	五三・四四
島取	五六・七〇	島根	六三・九九	岡山	六六・七六
廣島	六二・一三	山口	六六・七三	德島	五〇・四四
香川	五五・五一	愛媛	五四・一二	高知	六六・六三
長崎	五二・四四	福岡	五九・二一	大分	五四・一五
佐賀	五七・五三	熊本	五七・二五	宮崎	六一・八二
鹿兒島	四九・五六	沖繩	一九・九〇		

右の統計に據れば石川縣の普通敎育は最も普及せり、

◉八年間の强盜（統計集誌第百六十二號）

年次	月日（月、日）	發震時（時、分）	震動時間（分、秒）	水平動 最大水平動耗	水平動 最大速度耗	水平動 最大加速度耗	上下動 最大上下動耗
明治十八年	九、二六	午後 〇、〇二	九、〇〇	三秒間ニ 一三、七	一四、二	二九、七	一
同 十九年	五、〇八	午後 一〇、一四	一、四〇	零秒四分間ニ 二、八	二二、〇	三四五、七	〇、五
同 二十年	一、一五	午後 六、五一	一〇、〇〇	二秒三分間ニ 一九、二	二六、二	七一、六	五、五
	九、〇五	午後 三、二三	六、〇〇	二秒三分間ニ 二五、七	三五、一	九五、九	六、五
同 廿一年	二、〇二	午後 一、一五	三、四八	三秒七分間ニ 一三、〇	一一、〇	一八、六	〇、五
	四、二九	午前 一〇、〇〇	八、〇〇	零秒八分間ニ 五、六	二二、〇	一七二、八	一、五
同 廿二年	二、一八	午前 六、〇九	六、一二	二秒二分間ニ 二〇、三	二九、〇	八、二九	三、七
同 廿三年	四、一六	午後 九、三四	七、〇〇	二秒九分間ニ 二三、四	二四、三	五二、七	〇、二
同 廿四年	七、二一	午後 八、一九	六、〇〇	三秒六分間ニ 一〇、五	九、二	一六、〇	〇、五
	一〇、二八	午前 六、三九	七、〇〇	二秒四分間ニ 三一、五	四一、二	一〇、七九	四、五
	一二、二四	午前 五、三三	三、四〇	一秒九分間ニ 一六、二	二六、八	八八、六	二、〇
同 廿五年	六、〇三	午前 七、〇九	七、三〇	二秒間ニ 二八、四	四四、六	一四、〇〇	四、四

右八年間に於ける大震は、十九年の五月、二十一年の四月、二十四年の十月、二十五年の六月等に起りしものなり、

◉教會の門を常に開くべし（護教第八十五號）

佛寺は常に參詣する人あり、佛寺は常に其門を開く、佛寺は其庭園の風致に意を用ふ。而して教會は然らず。日耳曼の今帝曰く、願くば禮拜の時ならざるも常に教會の門を開け、是れ市民の宗教的感情を奬勵すべき爲め也と。

◎養鷄の快樂（京都家禽新報第十二號内村鑑三氏）

精神を疲勞せしむるものは憂慮なり、而して憂慮は人間社會の薄情不信實より來る、之を散ぜんが爲めには正實にして愆まる事なき自然物に接するに若かず、而て家禽は吾人に家を離れずして此放鬱の快を供するものなり、雌雄愛情の濃かなるの性、母鳥が雛を庇ふの風、放卵の狀孵化の態一として造化の微妙を示さゞるはなし、直に造化に接するは吾人の本性に立ち歸る事なり、家禽の常性亦た吾人を慰癒すること微しとせず。

◎農歌（農事新報第七十六號）

よもの海靜けきみよの小山田は八束垂穗の波のみそ立
事なくて二百十日のすぎしより民の竈はいと丶賑はふ
欲にこそ限りはなけれ八束穗の靡く今年を豊年とし
心して撰ひし稻の種なれば秋の實りは今よりぞしる
さまざまに改かふる農業も三年ためしてよし惡をいへ
杉扁柏椹や松の種とらば直ぐなるものと病なき木と
帆柱になる木も昔時きし種今まく種ぞのちのほばしら
春夏の田うちくさぎる勤しみぞ必らず秋の喜びとなる
もの作る業勤むるもいさゝげき功を國に立んためなり
もの作る民こそ國の本なれば萬の業のちゝはゝとしれ

高山彦九郎（口繪の繪解き）

高山彦九郎は寛政三奇人の一人として久しく世に知られたるもの。識見は林子平に如かざりしならん。學術は蒲生君平に及ばざりしならん。唯慷慨義烈にして能く士氣を鼓舞する力に至ては、亦二士の彼に一籌を輸する所なりき。

彼は當日の主權者たる徳川政府に反對し、天下を遊説して同志を募らんとせしに、事成らずして西九州にて

自殺したり。而して其京師に入るや常に縉紳の間を往來し、行て三條橋頭に到れば遙に王城を拜して流涕せしと云ふ。

時事一斑

何等の快報ぞ

一月三十日征清第二軍の一部第二第六師團の兵威海衛の東半を取り、二月一日其全部を占領したり。

然るに其灣口に横はれる劉公島及び島陰に潛みたる清國北洋水師の艦隊は、猶固守してありしが、連日我か海軍の攻擊する所となり、四日及び五日には夜中我が水雷艇に襲はれ、旗艦定遠以下沈沒し、殘艦は十二日午前に降參せり。提督丁汝昌は自殺す。

丁汝昌死す

清國水師提督丁汝昌威海衛口劉公島を死守し、力竭き勢窮まるや、使を遣して軍艦兵器を致し、而して其海陸兵及び雇外國人民人の解放を乞ひ、後事を處理したる後、定遠艦長劉步蟾劉公島守將張文宣と共に自盡して死しぬ。敵ながらも出來したりとて我が伊東艦隊指令官はさきに酒を贈りて之を慰め、丁の遺骸及び其他支那將校の送られて威海衛を出るや、我が艦隊は禮砲を放ちて丁を追悼する意を表せり。外國人支那人皆爲に深厚なる感動を起したりと云ふ。

汝昌の死せる、伊東司令長官の勝てる、好一對の佳話と謂ふべし。

高等女學校

最近調査に據るに全國高等女學校の數下の如しと、敎育報知に見へたり。

公立七校。内東京一校敎師十二人生徒凡そ二百人。栃木一校敎師五人生徒凡そ四十人。京都一校敎師三十人生徒凡そ五百人。大坂一校敎師二十三人生徒凡そ三百人。福井一校敎師六人生徒凡そ二十人。和歌山一校敎師二人生徒凡そ二十人。高知一校敎師五人生徒凡そ七十四人。

私立二十校。内東京十四校。三重、滋賀、鳥取、廣島、

山口、香川各一校。

講義錄

講義錄の出るもの次第に多く、次第に可なるもの增すに似たり。亦社會教育の漸く廣く行はるゝを見るべし。

中等教育

昨二十七年四月の調査に、全國尋常中學生徒二萬千五百五十一人にして、戶數二百八十一萬七千五百七十戶に配すれば、每千戶に付二人、八の割合なり。以て中等教育普及の度如何を見るべし。

海事教育

明治廿四年末に於て、全國專門學校百三校男生徒二萬四千百五十二人の內、海事教育の性質あるもの十校六百五十三人に過ぎざりしと。

海國たる日本は、日清戰爭に由て大に海國の實を發揮すべく起てり。顧ふに海事教育の叫び起るも恐くは遠きにあらざるべし。

支那語と朝鮮語

支那語朝鮮語を研究するもの漸く多しと聞く。是れ國家の膨脹に伴ふて個人の膨脹すべき準備にあらずや。

歐洲人の軀格

或人歐洲人の軀格が如何に成り行くかを知んと欲し、各國に於ける身長不足の爲め兵役に合格せざる者の數を調べしに、左の如き結果を得たりと一雜誌に見ゆ。」匈牙利國に於ては十年前不合格者の數百人中十九人四なりしが、今は百人中七十六人五六となり、獨逸にては百人中七人八なりしもの、十六人六となり、佛蘭西にては十六年間に同じく六人九なりしもの十三人三となり、伊太利にては千八百八十一年に百人中七人七なりしもの千八百九十一年には二十三人二となりたりと。然らば歐洲人の軀格は次第に衰へ行ものと謂ふべし。

奇特なる婦人

在北海道札幌河島愛子女史より、金三圓を送り來れり。而して言ふ。

一筆啓し奉り候未だ拜顏を得ず候へども聊か願上度き事御座候て止を得ず御披見を煩はし奉り候時分がら寒さきびしく候へどもいよ／＼御健やかにわたら

せられ珍重の御事と賀し上參らせ候扨て妾は軍人の妻にて常々御社の家庭雜誌を始め國民之友其他御社より出し給ふ所の物は何時も愛讀致す者に御座候良人は昨年十月より第二軍に從ひていつも〳〵戰爭に從事いたし居りしあるじ事此度の名譽高きいくさに從ひ得しは實に曾祖以來蒙りし所の國恩の萬分の一たりとも報じ奉る事を得て誠に夫の滿足のみならず我一家の喜びに堪えざる所に御座候就ては妾も此開け行く有がたき御代に生れ出で殊に軍人の妻たるうゑは何かいたし御國の爲めあるじとゝもに力をつくし度殊に身命を打捨て骨を異國にさらさんと働き給ふ兵士等の傷つきたまふ人々の看護の助けなりとも致し度き存念に候得共家には八十有餘の養母も御座候ゆゑ何分前述の如くにも參り兼ね候まゝ其代りとては誠におはづかしき事ながら一昨年良人當地へ轉任の際レングホンと申洋鷄を四羽持參いたし庭の片隅におき妾一手にて家政の暇閑に世話致し居候處此節は拾二羽に繁殖いたし申候夫等出產致すところの鷄卵をいつも勝手元にて買取事とし代金日々積み置き毎月末に至つて食料を差引殘金を聊かながら積みおき候處本月迄に四圓餘と相成申候に付聊かには候得共從軍者の遺族にして活計の困難なる人々に進じ度てそれ〳〵聞合せ候處當地には二戶御座候ひしゆゑ少々ばかり進じ參らせ候ひしが御地の人々へも參らせ度存じ候に付區役所か又は他の向きえでも依賴致さんかと存じ候得共何分聊か憚る筋も御座候ゆゑ御多忙の處甚だ恐入たるねがひには候へども雜誌の御ゑんにより失禮をもかえりみず願上候事に御座候誠に濱の眞砂の一數だにもたり申ぬ金には候へども若しも妾が微志を嘉みし給ふて幸に御分配の勞を厭せたまはす哀憐の涕の一滴にも相成候はゞ實に妾の喜びこれにすぎざる所に御座候あな〳〵かしこ

如月ついたち　愛子拜

家庭雜誌社

愛兄方の御まへに參らす

二伸右は御都合にて兵事會へ御出し被下ても宜敷御座候

我社は喜んで之を生計に困みつゝある從軍者の遺族に頒ち、以て寄贈者の好意を徹せしむべし。

日本昔噺

日本昔噺第七編 發刊廣告

依田學海先生序文　巖谷漣山人編
福羽美靜先生唱歌　三島蕉窓畫

舌切雀

全壹冊洋裝大判　正價金五錢　郵税二錢

舌切雀お宿は何處だ〳〵と尋ね行きしは北京か奉天か、輕い葛籠の分捕品は、金錢珠玉山の如く、重い葛籠と慾張れば、化物責の大失敗、仁義を重んじ利慾を懲らす、昔噺も今の世に、似たる例の日清戰爭、邪は到底正に勝たれず、なんと皆樣合點か、合點乎。

—（日本昔噺既刊目次）—

日本昔噺　正價一冊金五錢●全部十二冊前金五拾錢●郵税一冊金貳錢

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

第一編ヨリ取揃御注文ニ應ズ

横濱米國貿易商會にて發賣するスコット乳菓の大に名譽ある滋養食料たるとを江湖に紹介するの榮を得たり曩に大日本帝國が清國膺懲の師を起して以來連戰連捷大に世界に威武を輝かしたるは吾等の深く偉とする處なり仍て此の萬歳を祝し衷誠の意を以て大瓶百四十本餘のスコット乳菓を大日本軍隊へ獻芹したるに大に衛生上缺くべからざる滋養品たるを賞せられ併て該乳菓の廣告に一も誤り無きを證せられたり依て服用者諸君へ報告す

スコット乳菓東洋委員米國陸軍大佐　ヒル

●速記法 自宅獨習生 募集　月謝二十錢　二ヶ月卒業

規則入用者は郵券貳錢を投ずべし

東京下谷區徒士町二丁目三十一番地　速記學專修所

久保田米僊同米齋同金僊實見繪畫入

日清軍記 後篇

定價十五錢　郵税四錢

筆を山縣大將入韓に起し旅順占領の勇擧に收む章を重ぬる。七十有五　風光眞に逼るの繪畫數十あり。

山路彌吉著

再版　十二文豪第八卷

新井白石

定價十八錢　郵税四錢

發兌元　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

明治廿五年九月十四日遞信省認可

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　秀英舍印行